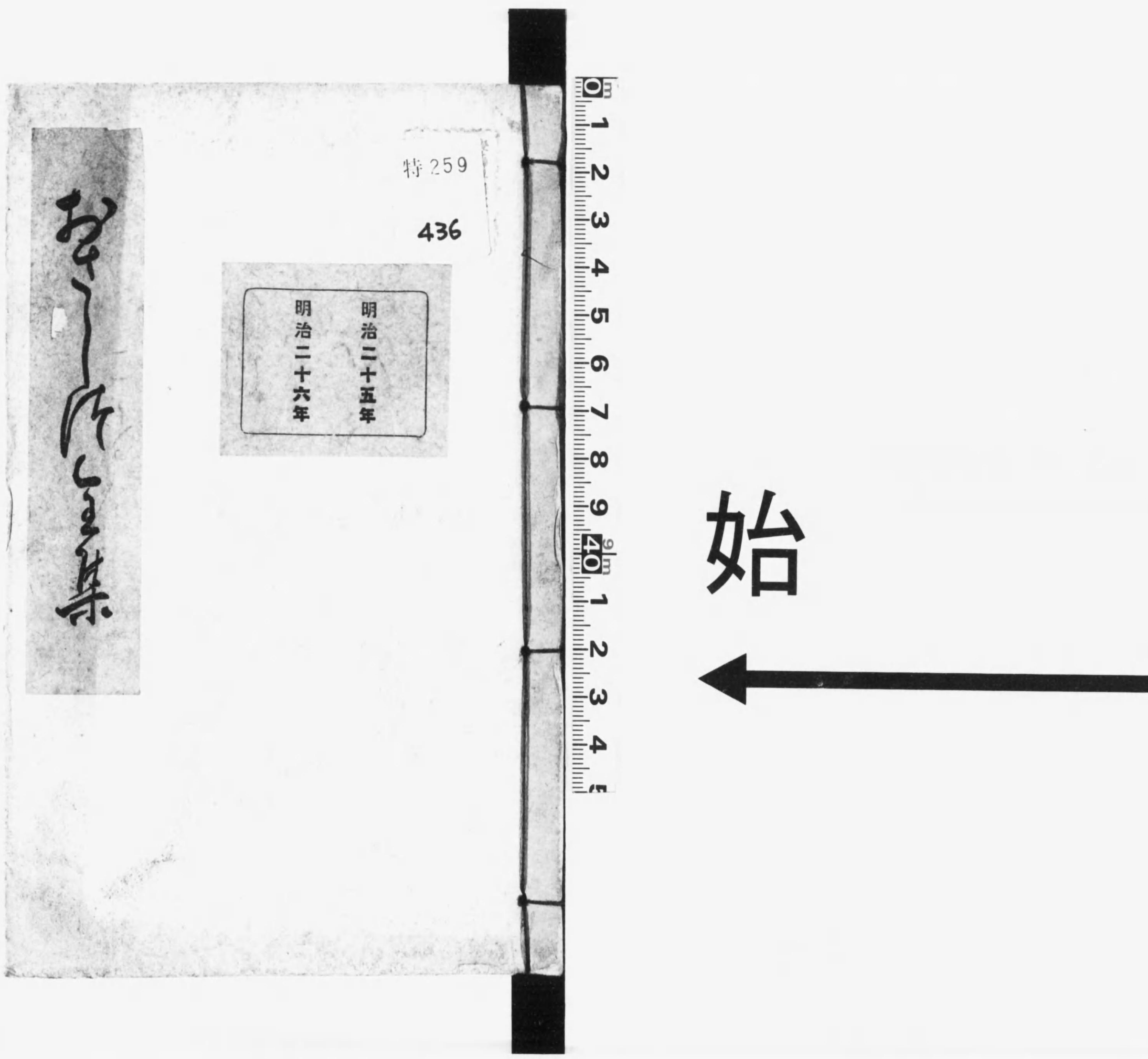
特259
436
明治二十五年
明治二十六年
始

特 259
436

おさしづ全集

昭和

おさしづ（明治二十五年）目次

△明治二十五年七月一日午前三時まへ刻限の御咄し（一頁）
△同年七月二日本月五日より御墓所着手の御願（二頁）
△同年七月四日信徒にして御道を聽き熱心の上より家業を捨てゝ御道のために奮發致したきもの有之時は如何取計可然哉心得のため御願（三頁）
△押て分支教會役員の内にて熱心上より御道につくす爲め家業打ちすてる事は如何に候や（四頁）
△押て郡山增田氏商法をやめるに付御願（六頁）
△同年七月四日明五日より墓地開さく着手に付

御酒一條御願　二
△同年七月四日夜刻限御咄し　（六　頁）
△同年七月七日飯降さと身上御願　（七　頁）
△同年七月八日松田源藏身上せまりたるにつき御願　（一〇　頁）
△同年七月十六日上田奈良糸身上の處御願　（一一　頁）
△同年七月二十五日御本席樣身上御願　（一二　頁）
△同年七月二十七日前のおさしづより一同決議の上次の項を分けて御願　（一四　頁）
△同年八月四日（舊閏六月十二日）永尾楢二郎頭痛し氣分あしきに付御願　（一五　頁）
△翌日御願　（二〇　頁）
（二一　頁）
△同年八月七日御墓所塚のまわり玉垣の下垣積む御願　（二二　頁）
△おして　（二三　頁）
△同年八月九日夜（舊閏六月十七日）永尾身上今一段速かならぬに付御願　（二三　頁）
△同年八月十三日高安分教會部内和泉我孫子講社内黑鳥村に於いて事件出來、堺裁判所にて公判尙控訴致すべきにや　（二四　頁）
△同年八月十六日（舊閏六月二十四日）　（二五　頁）
△同年八月十六日（舊閏六月二十四日）永尾よしゑ身上御願　（二六　頁）
△同年八月二十日寺田半兵衞身上御願　（二六　頁）

△同年八月二十三日（舊閏七月二日）永尾楢二郎身上御願　（二一八頁）
△同年八月二十五日寺田半兵衛家内中の處此度教會御道の爲他の處へ移轉の御願　（三〇頁）
△同年八月三十一日午後九時三十分刻限の御咄　（三〇頁）
△又引つゞき御咄し　（三三頁）
△同年九月三日御伺、前刻限事上より談示御本席樣宅を建築に付役員集會の上、會長樣の御許を請け談示相定まり地所の處は裏手の籔の處へ御許被下ますか御願　（三六頁）
△同年九月三日光原菊太郎三十九歳身上御願　（三八頁）
△同年九月五日御本席樣建家の間數の事件御願　（三九頁）
△今日石出しに付瀧本道作り御願　（四一頁）
△同年九月五日（舊閏七月十五日）永尾身上の處に有ますが奈良糸の處こちらへおさまり被下ば永尾の身上宜敷御座りますか其他にはこばんならん處ありますか　（四一頁）
△同年九月十一日御教祖樣御改葬に付御輿の處四方みすに致し度につき御許し下されますか御願　（四三頁）
△同年九月十七日御墓所門の處御伺ひ　（四三頁）
△同日改葬の御輿二つ造る願　（四四頁）
△同年九月二十六日寺田半兵衛是迄の居宅にて商業致居候處職場を新喜多新田へうつし、娘

たき、孫眞之介又おこう三人のもの家うつり
致し候樣夜よりこう、眞之介兩人せき出でに
つき御願　（四五頁）
△同年十月三日午前二時五十分刻限の御咄し　（四六頁）
△同年十月七日御本席樣身上御願　（四八頁）
△同年十月十二日梅谷四郎兵衞家内おたね目の
さわり御伺　（五〇頁）
△同年十月十四日夜、御本席樣身上御障りにつ
き前御指圖より申上願ふ積りで一言申上かゝ
る處へ　（五二頁）
△押て相談の上御願申上ますから他へ御出まし
下さる事は下さらぬ樣御願申ます　（五三頁）

△同年十月十四日寺田半兵衞娘こう（二十歳）
孫眞之介（七歳）兩人身上障りに付御願　（五四頁）
△同年十月十五日夜御本席樣御休息所普請の事
願　（五五頁）
△同年十月二十日寺田半兵衞娘こう前々よりだ
ん〳〵障りおもり候に付又候御願　（五八頁）
△おして身上の處はどうで御座りますか　（六〇頁）
△同年十月二十四日夜刻限の御咄し　（六一頁）
△又しばらくしての御はなし　（六一頁）
△同年十月二十六日墓所の建物三間半四間にす
る願　（六二頁）
△同年十月二十六日御本席樣御用所の建物六間

程にして夫より地所廣くして致し度につき御許し下さるか御願　（六三頁）

△同年十月二十七日寺田こう身上障りに付園原に預け有おなを、國太郎の兩人をよびとるに付梅谷たね迎へにいて被下つれて戻り其後で梅谷氏歸會の節の御伺　（六五頁）

△同年十月二十八日松本はる身上御願　（六六頁）

△同年十一月八日教祖樣御改葬當日は二十五日に致しますか二十六日に致ますか二十七日に致しますか此三日の內幾日にして宜敷やであります　（六七頁）

△押て前もつて仰せ下さるは二十五日に致す事　（六八頁）

△同日御改葬の當日巡査三十名警備の願　（六九頁）

△改葬通行道路は守目堂池を西へ下り丹波市に出で上街道を北へ進み田部より別所に登り新墓地へ至る迄處御許被下ますか御願　（六九頁）

△送葬の時御本席樣御送被下ものでありますか御伺　（七〇頁）

△同年十一月十一日舊十月二十六日は教祖樣改葬に付其前後分教會所月次祭の處前日に勤め濟まし度に付事上御願　（七一頁）

△同年十一月十六日寺田半兵衞孫眞之介身上につきせき出でだん〳〵せまり候に付母たきの事情も申上げ　（七一頁）

△一つ二つと仰せ被下實に眞之介身上の處如何で有りますか御願　（七三頁）
△同年十一月（舊十月一日）午前四時刻限の御はなし　（七三頁）
△同年十一月二十一日御本席樣腰のいたみの事情御願　（七五頁）
△同年十二月五日御教祖樣御改葬當日の事情
第一、辨當二十五日に出す願　（七八頁）
第二、御酒を豐田山麓にて出す願　（七八頁）
第三、辨當置場南の屋敷にする事　（七九頁）
第四、本部員分支教會長乘馬の事　（七九頁）
第五、分、支教會長及び女の者共車に乘る事　（七九頁）
第六、墓所にて御勤めを致しても構ひませんかなれど世界の事情も御座りますで玉串だけに致しますもので御座りますか御願　（八〇頁）
第七、刻限に掃除とゆふ事あるに付て　（八一頁）
△同年十二月六日御教祖樣墓地繪圖の事に付御願　（八一頁）
△消防會葬事上御願　（八二頁）
△同年十二月二十日教會獨立事件事上御願　（八三頁）
△會長樣上京致して宜敷御座りますか又代理にても出ましたもので御座りますか　（八五頁）
△會長樣押て御自分からやらしてもらいますと御願　（八五頁）

△さよなら本日より出立する事御願　（八六頁）
△本局管長様より會長へ呼狀付て御座りますか
　會長上京致すもので御座りますか、前川氏代
　理で出しましたもので御座りますか御願　（八六頁）
△前川、橋本、平野、清水隨行上京の願　（八七頁）
△共にやらして貰いますと御願　（八七頁）
△さよなら今日よりたゝして貰いますとの御願　（八八頁）
△御墓所の下へ番する處建物二間に三間の物建
　度御許被下か御願　（八八頁）
△山の入口へ關門建て度に付御許被下か御願　（八八頁）
△ぐるりへ垣致し度願　（八九頁）
△井戸一ヶ所堀り度御願　（八九頁）

△同年十二月二十日午後、前日御本席様御身上
　御障りの處御伺ひ　（八九頁）
△御本席様御用場普請繪圖面どふり御許被下ま
　すか御願　（九〇頁）
△これにて御許下されますか御願　（九一頁）
△同年十二月二十一日日々御授け御本席運び下
　さる處つかへて有ますから如何様に運ばして
　もらいまして宜敷御座りますか御願　（九二頁）
△同年十二月二十四日御本席御用場御普請繪圖
　面改め八間にして御建申度御許被下か御願　（九三頁）
△雪隱二ヶ所御願　（九三頁）
△風呂場の御願　（九三頁）

△それでは材木買入の御願（九四頁）
△墓地の垣北西東方致度に付前より押て御願（九五頁）
△押て後ろ垣だけ御許被下度願（九五頁）
△同年十二月二十七日御本席様昨日より御身上少々御障りに付事情御願（九六頁）
△昨日御授け順序の處三名づゝ三席とのよふに思ひますが押て御願（九七頁）
△同年十二月二十八日飯降おさと身上御願（九九頁）

おさしづ（明治二十五年）目次終

おさしづ（明治二十六年）目次

△明治二十六年一月十三日夜二時四十五分刻限の御咄し（一〇一頁）
△同年一月十五日午後十時十分前の刻限は本席様御用場の事と考へ候へ共何分不行屆の者にて確とさとりかね候に付如何に候や押して願（一〇四頁）
△押して本席御用場普請の圖面は此中御ひき下され候ものにて建築御許し下さるや（一〇六頁）
△押して右普請につき相談のため東京へ至り候てよろしきや、又は御歸りまで相待つてよろしきや（一〇七頁）

△しばらくして
△同年一月十九日（舊十二月二日）前裁松本太平地所併に水車納屋共買入御願　（一〇七頁）
△同年一月二十一日御本席聲かすむに付願　（一〇八頁）
△同年一月二十一日會長様外四名東京より御歸り下され候に付事情御願　（一一〇頁）
△同年一月二十九日用場所普請願　（一一二頁）
△押して願　（一一三頁）
△押して願　（一一三頁）
△押して願　（一一三頁）
△押して願　（一一四頁）
△同年二月四日本席様用場所普請の願　（一一四頁）

△明日よりかゝらしてもらひます願　（一一五頁）
△同年二月四日夜御本席様用場御普請願　（一一五頁）
△押して御本席御思召通りにさとして貰ひまして宜敷御座りますか願　（一一九頁）
△同年二月五日夜御本席様御用場普請の處前晩の御指圖より運かた申上普請同日よりかゝらして貰ひます願　（一二〇頁）
△押して申上　（一二一頁）
△同年二月五日午後一時三十分頃本席様御用場普請のことに付是迄の處詰員一同の屆かぬ義御詫申し上げて御許の願　（一二二頁）
△普請の處今日より押して御願　（一二三頁）

△同年二月六日朝事情願　（一二六頁）
△同年二月六日前事情につき會長様初め役員一同御本席の御機嫌伺ひに出でし際の刻限　（一二七頁）
△暫くして　（一三一頁）
△同年二月八日御本席様御普請間取九間としての願　（一三三頁）
△同年二月八日（舊十二月二十二日）用塲所建築地の東に隣接せる稻田源次郎二畝餘歩の田地を買入の願　（一三四頁）
△同年二月二十日分教會、支教會、出張所、布教所事務取扱等會議事情相定め右事情申し上て願　（一三四頁）

△同年二月二十一日來る舊二月一日二日御本席六十一歳御祝の事情御願　（一三五頁）
△御祝につき御ごくの事　（一三六頁）
△同年二月二十四日（舊正月八日）分支教會長會議の上將來は綿服に改め政府製艦費に一萬圓献金願　（一三六頁）
△押して願（義捐金の願）　（一三七頁）
△同年二月二十五日綱島分教會これまで月次祭二十五日の處本部月次祭に差支へ候故二十二日に願替致し度御願　（一三八頁）
△同年三月四日（舊正月十六日）村田長平豐田御墓地埋葬の願　（一三八頁）

△同年三月九日飯降さと左の乳の下いたみねがへりも自由ならざるに付御願（一三九頁）
△同年三月十一日飯降さと前の通り身上再び御願（一四〇頁）
△同年三月十二日飯降さと身上すみやかならぬに付御願（一四一頁）
△同年三月十五日朝飯降さと身上願（一四二頁）
△押して（一四四頁）
△同年三月十五日午後飯降さと身上本部長様より御願（一四四頁）
△同年三月十八日飯降さと身上の處まだすみやかならぬにより今一度會長様の手順をはこび神様に御願申度旨御本席へ清水、桝井二名より御願下さる節御本席火鉢にもたれての御さとし（一四五頁）
△押してよしるより今一度ふんばつて下されたき旨御願（一四六頁）
△同年三月十八日午後一時御咄（おさと様死去の節）（一四六頁）
△同年三月十八日夜一時三十分刻限（一四八頁）
△しばらくして（一五一頁）
△同年三月十九日午前一時三十分刻限（一五一頁）
△同年三月十九日午前二時十分事情御願（一五二頁）
△同年三月二十三日御本席様聲が出にくいにつ

き御伺

△同年三日二十四日御本席附の人は男でありますか又女でありますか御願（一五七頁）

△同年三月二十六日（舊二月九日）御本席様御普請の石築明十日十一日致したきにつき御許の願（一六〇頁）

△同年三月二十八日（舊二月十二日）本部内にのべ石を敷く御願（一六一頁）

△同年三日三十一日（舊二月十四日）神樂歌版行の御許願（一六二頁）

△同年三月三十一日赤尾きぬゑ夜分せきでるにつき願（一六二頁）

△同年四日六日飯降氏齒のいたみにつき御願（一六三頁）

△同年四月十日上田奈良糸身上願（一六四頁）

△同年四月十日御本席身上願（一六五頁）

△押して出張所、布教所出願細則の義（一六七頁）

△押して教導職選擧の事（一六七頁）

△同時政甚氏身上願（一六八頁）

△おして（一六八頁）

△同年四月十五日、十六日（舊二月二十九日、三月朔日兩日）御本席様御宅上棟式御許の願（一六九頁）

△又押して御よろこびに付分支教會へそれ〴〵知らしましたものでありますか願（一六九頁）

△同年四月十五日寺田半兵衞娘こちか（十八歳）

肩より上に腫物出來上唇はれ上りたるに付御願又外方より縁談の事申來りたるにより併せて御願（一七〇頁）

△縁談の事御願（一七一頁）

△同年四月十七日永尾よしゑ身上御願（一七一頁）

△同年四月二十一日御本席身上願（一七二頁）

△同年四月二十四日此間本席様身上願の御指圖により毎月一六の日及月次祭當日併せて一ケ月七日間御休事情願（一七三頁）

△同年四月二十五日永尾芳枝身上御願（一七五頁）

△同年四月二十七日昨日御本席様身上御障りは如何なる事に候や御願（一七六頁）

△引續き

△前三點の指圖の處如何なる事か押して御願（一七七頁）

△同年四月二十九日御本席様身上の御指圖につき本部長様御歸會の上御尋出に相成、過日夜半に盗人はいり、且本部長様目ぶたの處きづ被成候に付事情御願（一七八頁）

△同年五月六日御本席様身上腰の痛みにつき御願（一八一頁）

△同年五月十一日夜（舊三月二十六日）御本席様御腹の痛みあつた事情御願（一八三頁）

△同年五月十一日午後十一時五十分刻限（一八五頁）

△同年五月十一日夜二時十分篠森教正の事御願（一八七頁）

△押て願
△押て篠森教正御屋敷に入れぬ樣に
△押て願會長へ申上朝神樣取次一同御わび申上ぐ
△押て願一同御わび申上
△同年五月十二日夜是迄篠森氏事務所詰の處本部員相談の結果事務一切取扱見合さす樣談示の上御伺
△同年五月四日朝御本席樣俄に御身上願
△押て願
△又しばらくして
△赤十字社の事情御願

（一八七頁）
（一八七頁）
（一八九頁）
（一八九頁）
（一九二頁）
（一九八頁）
（一九八頁）
（一九九頁）
（一九九頁）

△同年五月十五日日々運び事情三點の處此頃澤山つかへてありますから何とか御許下さるや御願
△同年五月十七日御本席樣足をくゝられてあるやうにて御身上もすみやかならぬにより御願
△しばらくして
△しばらくして
△又しばらくして
△おして政甚氏の身上治まりの處願
△同年五月十七日夜（舊四月二日）前の御指圖に依て役員一同集合めん〳〵生命をちゞめても御本席身上長らへて頂きたく其上政甚氏の

（二〇〇頁）
（二〇一頁）
（二〇一頁）
（二〇二頁）
（二〇二頁）
（二〇四頁）

治まり方に付御願
△押て兄弟の内政甚氏の方先か政枝さんの方先か伺　（二〇四頁）
△御本席様付御守りの人は男でありますか女で有ますか　（二一一頁）
△押て女でありますか御願　（二一一頁）
△押て晝の御指圖よりめん〳〵生命をさし上げても御本席様御身上長らへて戴き度願　（二一三頁）
△同年五月十八日（舊四月三日）前御伺より集合の上政甚氏身上の治まりに付梅谷平野清水増野の四名係員となりて運びの事願　（二一五頁）
△押て御守人の所喜多と定めて事情願　（二一六頁）
△押て増井りん御守人として願　（二一七頁）
△又人中くり上げの事情願　（二一八頁）
△またしばらくしてさしづ　（二一九頁）
△同年五月二十五日寺田半兵衛二十一日正午より腹痛甚敷身體自由ならず食物いたゞく事出來ず役員談じの上光原氏二十四日御地場へ罷出二十五日朝御伺候御言葉此時娘こちかの面てい眉毛の上に出來物出來目もはれふさがり痛み甚敷同時に御願　（二二一頁）
△同年六月十二日午後席運びの跡にて御火鉢の所へおすはりなされて御喘し　（二二二頁）
△同年六月十二日夜飯降まさゑ治まり方事情御

願

△同年六月十四日（舊四月二十九日）木小家建築御免の願（二二二三頁）
△同年六月十四日本部事務所及墓所事務所に盗人入りしに付御願（二二二六頁）
△又おして願（二二二七頁）
△同年六月十七日永尾芳枝身上御願（二二二八頁）
△同年六月二十日萩出張所設置に付本部より出張方願出でしに付出張致す事御許の願（二二三〇頁）
△永尾、高井兩名出張の事御願（二二三〇頁）
△同年七月七日奥村忠七右の指のさはり御願（二二三一頁）
△同年七月八日（舊五月二十五日）昨日御本席

席の中に御聲とまりかすむ樣なりたるに付御願（二二三二頁）
△同年七月十二日（舊五月二十九日）夜十一時四十分昨日より御本席樣御身上御障りに付事情御願（二二三二頁）
△同年七月十二日夜前の御指圖に付御願（二二三三頁）
△會長殿の御身上御願（二二三五頁）
△日々授の事御願（二二三七頁）
△引つゞき（二二三八頁）
△同年七月十六日前御指圖に依り會議の上規則教會所設置請願手續取消、出願の節は本部員會議の上取調本部長に許否を乞ふ願（二二三九頁）

△同年七月二十九日寺田半兵衛娘おこう三年以前に縁付の事御とめに相成りしに付此度教會相續のため養子をもらい度用文は神様の御答有之ての事で御座りませうかの御願、増野氏取次にて願ひのおさしづ　（二四〇頁）

△押ておこうに養子をせいらく致しませうか教會の治めかたを致しませうか　（二四一頁）

△押ておたきの事情御願　（二四二頁）

△同年八月三日諸方より雨乞願來り候に付心得のため事情願　（二四二頁）

△同年八月四日高安分教會より雨乞の願　（二四四頁）

△おして教會内にて致しますか又領内を廻ますか

△おして御神樂道具を揃へていたしますか　（二四五頁）

△押て教長殿より御勤の事御願　（二四六頁）

△同年八月四日御本席様御身上願　（二四六頁）

△同年八月御墓地の井戸矢入れる事上願　（二四七頁）

△同年八月十九日四五日前より御本席様兩足少々痛み事上に付御願　（二四八頁）

△前日より御本席はこぶ人五人程有ますから、是はよぎなく御方に思ひますから如何御願　（二四九頁）

△同年八月（日不明）梅谷様内々の處心得の爲御願　（二四九頁）

△同年九月一日京都羽根田文明なるもの天輪王

辨妄と題する小册子を著述し攻擊せしにより反駁して宜しきや又訴訟にても起して宜敷や御伺　（二五〇頁）

△しでらくして御さとし被下候　（二五二頁）

△同年九月七日暑氣のため休業中の日々事情扱願　（二五二頁）

△同年九月二十一日寺田半兵衞娘こちかのどへさしこみ息とまる樣になる故の御願　（二五二頁）

△押て西京河原町分教會理事宇野緣談の御願　（二五三頁）

△同年十月四日御本席御授け御運び被下中にてせきが出で痰がつかへるに付心得の爲御伺　（二五三頁）

△同年十月五日朝三時四十分刻限咄し　（二五五頁）

△同年十月五日此日政甚氏小夫へ行つて歸りに初瀨へ行き其時歸りに相成本席より政甚氏に說諭せられし時御咄し　（二五六頁）

△押して清水氏より御詫被下候　（二五七頁）

△同年十月七日本席樣御身上に付御指圖且本席身上障りあり其外事情申立御願　（二五八頁）

△同年十月十三日會長樣御身上の願　（二六〇頁）

△同年十月十六日本席右の脊先より胸痛に付御伺　（二六二頁）

△同年十月十七日醫藥の件に付必ず醫師の診察を經て御道上の御咄する事情御願　（二六四頁）

△奈良縣下は派出して最寄教導職を集めて御咄

しを傳へる事

△前川宮森喜多永尾の四人南北に手分して奈良縣下巡回する事　（二六六頁）

△他國分教會長或は重立たる者を本部へ招集して右咄しを傳へる事　（二六七頁）

△同年十月十九日本席様身上夜前三時頃より御障りに付如何なる事情の御知らせにや御伺　（二六七頁）

△ふしをはやくとの御諭しは如何なる事情にて御座りますか御伺　（二六八頁）

△又押して御願　（二七〇頁）

△御本席様もりの處御願　（二七〇頁）

△同年十月二十二日御本席様御飯召上り下さるに味なうあるとの仰候に付御伺　（二七二頁）

△同年十月二十二日永尾氏の内もりの事願　（二七四頁）

△同年十月二十二日上田嘉助氏身上御願　（二七五頁）

△同年十一月十一日東分教會長上原佐助氏身上願　（二七六頁）

△押して事情つかへてあると仰せ被下處御尋ね　（二七七頁）

△同年十一月十二日永尾氏小人絹江身上御願　（二七八頁）

△同年十一月十三日上原氏願前御指圖により右事情は日本橋分教會に引直しとさとらして貰ひますと願　（二七九頁）

△押して左様ならば歸りましたら役員に談示致します尚芝支教會及淺草支教會の事情も御座

りますにより當本部より兩三名御苦勞願度事
上願

△同年十一月十八日御本席様身上御願　（二八〇頁）

△同年十一月二十六日御本席様家移りの願　（二八〇頁）

△押して氣のやしなひの處御願　（二八二頁）

△同年十一月二十六日教長様御身上御願　（二八三頁）

△押して氣のやしなひと仰せ下さる處は政甚氏
なり政江さんの緣談で御座りますか御願　（二八四頁）

△同年十一月二十八日夜十一時二十分頃刻限の
御はなし　（二八五頁）

△同年十一月十一日先の分支教會出張所大祭
に付提灯立旗出す事本部へ願ひに參りますが
一つ〳〵神様へ御願ひ申さんならん者であり
ますか心得のため願　（二八六頁）

△同年十二月三日御本席様御移りの御願　（二八八頁）

△押して信徒一般取扱の處は正月節會にさして
頂きます御願　（二八九頁）

△同年十二月三日（舊十月二十六日）午後十時
御本席様御引移りの席にて御咄しあり　（二九〇頁）

△同年十二月四日芳枝、まさへ、御本席引移り
の時おとも出來ぬに付腹立たれ桝井氏增野氏
の二名取扱はれ事情につき御本席様古屋へ御
歸りに相成る事情　（二九〇頁）

△同年十二月六日御本席様御側へ本部の内一名　（二九二頁）

づゝ交代出勤する事御願　四〇
△押して前川喜三郎かはりに山田吉之助出勤する事　（二九五頁）
△引續き女中おりんにたきの事情　（二九六頁）
△同年十二月六日左樣ならば今日より出勤する事に取極めます　（二九六頁）
△引つゞき御はなし被下候　（二九七頁）
△同年十二月七日本部内日々の處道が盛大になるに付分教會長を二人づゝ詰させて本部員の手助をさして頂き度御願　（二九九頁）
△同年十二月松村おさく教祖樣御もりの處願　（三〇〇頁）
△同年十二月十一日朝事情願濟みし後引續きて御咄しあり　（三〇一頁）
△同年十二月十六日夜十二時刻限　（三〇二頁）
△同年十二月十六日御本席樣昨夜は齒痛み頭痛につき御願　（三〇五頁）
△同年十二月二十四日先々分支教會より節會の事御願に參り夫に付心得迄事情申上御願　（三〇六頁）
△押して他の處より願に參りましたら詰員より咄しで御許し被下か御願　（三〇七頁）
△同二十六年　（三〇七頁）

おさしづ（明治二十六年）目次終

明治二十五年

おさしづ　（明治二十五年）

△明治二十五年七月一日午前三時まへ刻限の御咄し

さあ〳〵これなんともわかろまい、たゞこえばかりではわかろまい、よふかき取てさとしてくれ、はやく聞たらはやくわかるやろ、あついさむいのりはあろまい、年々のりを世界とゆう、また〳〵だん〳〵よりくるところ、めづらしとところとゆふ、よふきゝとれ、なんにもない處よりはじめかけたる處、人間心さら〳〵ない、なにがえらいとゆふたとて、ほんの音だけきくだけやろ、何もこしらへはいらん、どんな事もひながたとゆふ、どれだけの事したとて、りにあたらねばこふのうとはゆはん、

ふしぎ〳〵でゝくるところ、一時一つの理があれば、どふゆふものであろ、どれだけこふせにや人がわらうとおもう、何がわらおうぞ、わらうはたのしみとだしてある、どんな事も尋ねかけてはこべ、けつぎだけではおもい〳〵のりがあろう、こくげんとゆふりははづせんで、こくげんはなんでもない事はよばんで、これよくきゝ取てくれ。

△明治二十五年七月二日本月五日より御墓所着手の
御願

さあ〳〵尋る〳〵處、尋ねば一つ事情さとしておく、かゝりかけとゆうは、みなぜん〳〵もつて地所おもわく尋る處、じゆう〳〵ゆるしおく、これだけとゆふ處、すつきりひらき、どうゆふ事にしてこふゆふ事にしてと一つであろう、まあ一時これはこふかいなあ、ほんにこれかいなあ、ところとゆふはいつ〳〵までしるしとゆう、ちいさき木をうえかける、そこでりつぱな事は受取れん、なぜうけとれんとゆふ理あろふ、受取れんとゆうはよふきゝわけて、是一つ注意一つのりにさとしおく、ひろく地所これかいなあ、ほふむり地かいなあと、おもい〳〵あきらか事情がさかへるとゆふてさとしおく、づいぶんするにでけんでもないなれど、地場〳〵さとしたる、又さとしているやろ、かゝりかけとゆふはけふとじゆんじよ定めてこゝろいさんでかゝりてくれるよふ、さしづしおこう。

△明治二十五年七月四日信徒にして御道を聽き熱心の上より家業を捨てゝ、御道のために奮發致したきもの有之時は如何取計可然や心得のため御願

さあ〳〵事情尋ねる〳〵、心得の爲め事情、さしづ一つおよびおこう〳〵、一時の心定めるは受取る處、よう聞き分け、一代の處は長いやうなもので短い、はこんでつくしてゐる間は長く、そこで一代の處は長いやうで短い、長いと短いとよう聞き分け、一時の處なる程わかつて、深きたのしみと思ふ、一時の處ようきゝわけにやならんで、一度の處は二度三度心もつて事上は世上せかいの理もある、ことしもかうであつてかうといふ、一時どうせいとはいはん、そこでようきゝわけ、思ふやうにならん、これだけはこぶのにならん、定めてゐるのになあと思ふ、それで精神定めてすれば重々の理に受けとる、これ一つさしづしておこう。

△押て分支教會役員の内にて熱心上より御道につく

す爲め家業打ちすてる事は如何に候や

さあ〳〵尋る事情、たいてどうといふ、一つ定めてどうといふ、どんな理もさとし、なるもならんもいんねん、いんねんきゝわけて定めるなら、一時定めてくれ、因縁といふよほど定めにくい、世上に於いて人々中といふ、いんねんといふ理定めるものすくない、一代二代三代かはり〳〵これきゝわけ、又先々生れかはりといふ事情、たゞいんねんといふだけきいて、どういふ理でなるといふ、これわかりたものはない、生涯末代といふて、なくなるも因縁、皆同じやうになるはいんねん、そこですつきりうつくしいあらひきりて、くらさしたいは因縁の理にあるのや、そこでいんねんきゝわけ。

△押て郡山増田氏商法をやめるに付御願

さあ〳〵尋ねる事情〳〵、尋ねる處みんな同じ理、尋ねる理をきゝわけ、ぜん〳〵より傳へたる同じ理、これきゝとるならわかる、これからせいしんといふてある、日々たのしんでこうといふは受け取る、ぜん〳〵つたへたる、これ一時の理にはそんならどうなるといふ、なれどかうといふ理さとせん、因縁よほど通りてある、一つ心定めてかうといふのや、ずいぶん重々の理に受けとるといふ。

△明治二十五年七月四日明五日より墓地開鑿着手に付御酒一條御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ事情尋ねば一つさしづ、一日の日をたづねて事情初めかける處、みないさんで〳〵いさんでかゝ

らにやいかんで、事情長くとふりかける、これより事情さあ〳〵ゆるしおこう、心をきのふかゝりてくれるがよい。

△明治二十五年七月四日夜十二時刻限御咄し

さあ〳〵〳〵〳〵、一寸出てはなしするで〳〵、どふゆふ事もはなしかける、やれ〳〵まあ〳〵いつもなんぼはなしたてきかす、そのばは一寸それがそふであろか、これはこふであろかなれど、さとしだけどふもならん、なんぼゆうてきかしてもさとりやとゆう、さとりやないで、にがいものでも口であまいといへばゆえるやろ、これをきゝわけ、さとりはさとりよふでどふ事情をこかそとまゝや、あまいものでもからいとゆふ、これも同じ理、たいそふ〳〵とゆう、たいそうな事は受取れんとゆふ、よふおもふてみよ、たいそふなりは受取れるか、かみわ

けてみればわかるやろ、ほんにこれがあじであるか、あぢはいろである〳〵、どう〳〵きかしておこう、心にくつたくとゆふりははんぜんすがたをみせる事できん、ぢゆうよふぢざいとおもはくのりで、とふればあざやか、心の理のよるのがせかいとゆふ、このたび一つのりをはじめかけた事情、一寸おもえばめづらし事や、おもわくやとゆふ、けつこふな道やとおもう、おもうはりなれど、よふきゝわけ、日々の守護はなみたいていやあろまい、一寸はじめて重々のりにゆるし、心おきのふかゝれとゆるしたるからできるやろ、又せにやならん、いさゝかなる處みなたのしむ、よろこぶ處一寸一口おみきとゆふ、是迄つくす心は受取らにやならん、おみきとゆうは笹のはにしめしたゞけでもおみきとゆふ、そこではでな事いらん、一時のあぢをき

いてかざをかく、一寸いてこうかとゆふ、元々人間はじめた此やしき、かりものすてる處何もはでな事いらん、このりさへき〻わけるならあざやか、人間とゆうは一日なりとまめそくさいでゆうが一時のこゝろ、どふぐをすてる處にはでな事はいらん、ほんの地所とゆふ、世上ではたいへんな咄しをきいたけれど、そふでもない、入口には金の柱もたつとゆふたのにほんにそうでもないとゆう、一時のにほひとゆうはきえやすきもの、ふかき事情心のりとゆふは、いつ〳〵までのにほひとゆう、此事情きゝわけ、一時の道をとふるとゆふ、あたらしいにほひとゆう、つけたにほひやからさめやすい、道具とゆうかりものとゆふすてるとゆふであろ、なにほどかたく〳〵とめて事情さとす、一寸事情こしらる〳〵、さしづなき事情も咄し、あらあゝ

ぢやないとさんらんの事情をはこぶ、もふ中々づゝのふてならん、身の内くるしいとゆふ、みなそれ〴〵には事情がせく、なんどきともわからんといへば、も一とたびまあ一日なりと念じる神やろう、人間はじめたやしきゆく〳〵の道をおもへ、かりものとゆふかやすとゆふ、ひろくとゆふてある、ほんに芝ほでよいで、さあ〳〵こくげんしらした事はちがわんで。

△明治二十五年七月七日飯降さと身上御願

さあ〳〵尋るところ〳〵、どうゆふ事で身の處尋る、よく事情きかしてくれ、他に一つ世上事情一つ第一とゆふ、これまで長い間一時なかつた、今一時おもわくおもう事もあろまい、せつなみ〳〵事情とゆう、よく事情聞ゑてたんのふ、しばらく事情こゝろ通り、一時事情定め、なんでもしばらくつゞいて事情やく〳〵、とき〴〵一つの理におもうやろ、おもふやない、しばらく不足日々せつなみ、だん〳〵月々年々一つのりおもい事情、せつなみとおもう、どふなりたがい〳〵、事情はやく事情きゝ取て身の事情、いつ〳〵一つの理とさとしおこう。

△明治二十五年七月八日松田源藏身上せまりたるにつき御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情もつて事情、一度事情は内々一つこれではとおもふ心、事情あと〳〵身の内如何になる、心どういふ事と思ふ理であろふ、よう事情理を聞き取つて、どうでも聞いたる一つの理、しんじつ理を改め、定まる又々の日もあろ、重々の日もあろ、たのもしい日もあろ、聞取り一つあざやかの理さとしてくれるやう、おだやかといふは靜まるがおだや

か、心に理をもつからおさまる、身上に事情あればわたるにわたれん、こすにこせん、どれ丈け事をおもへども、只一つの理みるも一つ、聞くも一つ、たのしみも一つ、どれだけ事情も一つ。

△明治二十五年七月十六日上田奈良糸身上の處御願

さあ〳〵尋る處〳〵、いくゑも尋る〳〵、いくゑの事も尋る、さあ日々の處にてむつかしい事はこびをもいぜんよりつたへてある、さとすればこゝろまちがい、どふもならん、これだけはこぶがつくすが日限とふりどふもならん、なにがせめるくると心でおもうとふりになる、一日の日つとめさしたる心になればゝ、何もいう事はない、めん〳〵心でこしらゑばなんぼゆてきかした處がどふもならん、ぜん〳〵さとしたる、一時をもいたちたる處、日々どふであろう、よふきゝわけ、何がくる、何でる日々ゆう事おもう事、心でおもへばおにもじやもいつとゆふ、長くとゆふ心でおもうだけの理であろう、何かほふとうちわすれ、いつ〳〵とゆうりがない心をさまろまい、よふきゝわけ、ぐわんぜなきりであろふまい、ぐわんぜなきものではあろふまい、一時どふもならん、めん〳〵心でおもう理ぐちでてる何程ゆうてきかしてもこれまでじゆう〳〵さとし、なんどさとしたる、人間と〳〵のりもはこんであろふ、みなめん〳〵うらみどれだけのものやろとゆふても、にげてしまへばどふもならん、これだけ一つさとしおこう、たのしみなくばどふもならん、どふなろかしらんしらん、めん〳〵こしらへていづんでならん、たのしみなくばいづむよりなき、よふ〳〵みちはじまり

さきのみちをたのしんで、やれ〳〵身上不足なきものほかへたれどふ事上に事上こしらへるのや、よふきゝ十分つたへてくれるよふ。

△明治二十五年七月二十五日御本席様身上御願

さあ〳〵一こゑは尋にやなろまい、尋ねばきこうがための事情であろ、きこがためなら一つさとしよふ、一時の事情つとまる、つとまらんの事情、一日やすんで又二日三日とゆふ、さあよくきゝとれ、りをさとしにでた一日はよい二日はよい三日はよいなれど、こんどは事情のりにはかりがたない、どふよと尋る、たづねにやならん、是迄とゆふはわからん〳〵の道、これ一つ理をきゝわけ、一席とゆふ、又一席又一席よく聞いて事情に道があれば道がある、理があれば理がある、支教會や支教會、分教會を題として支教會出張所とゆふ、つゞまる處一人ともゆうであろ、是迄の事情にはとんとわかりがたない、一日〳〵の理のおさまり、一つ〳〵の道のり、どれだけせつなみしやんでいるといへど、何時なりとさとすなれど、聞わけにや何にもならん、高い處できるおふくできる、一時にきかすなんぼ尋たとてりにきゝわけなくばなをしてあるもおなじ事、さとりとゆふはいくゑの理もあろ、一日つとまらん、二日つとまらん、三日つとまらん、こんどははかられん、あざやかさとしおこう、さあ〳〵しつかりきゝわけてくれにやならんで。

△明治二十五年七月二十七日前の御さしづより一同決議の上左の項を分けて御願

さあ〳〵尋るであろ、一二三との印を打て尋る、第一の事情に
さとしてある、一寸にはわかろまい、どふでもこふでもおよぼ
すだけはおよぼさにやならん、三年とゆふ千日とゆふて定めた
る、千日さきとゆふはこふなる、三年いぜんにさとしたる、一
時の道といふ、これはさとりちがいきゝちがい取ぞこない、よ
ふきゝとれ、あつた事情をさとすやない、さき〳〵の事情をさ
とす、道によりて千すじとゆふ、これからとゆふ一つのりとゆ
ふは、事情は日々さとしている、よりくるものにはさとさにや
ならん、修理とゆふこゑとゆふ、しゆりがぬけてもなろまい、
こゑがぬけてもなろまい、行さきにはどんな處もできる、なれ
ど修理せばみはのるやろ、又一時みのところ不足なる、日々の
取扱ひ一時はこびにくい處から尋る事情、何でもないとおもへ

ば何でもないなれど、おもへばおもうだけの理はある、さきの
はこふや今のはこふやと、又のりをこしらへてはどふもなら
ん、どれだけのものでも何ほどねうちのあるものでも、世上に
一つのりがなければ何にもなりやしよまい、何でもない處から
始まりた道をしやんせよわかる、夜といへば夜、ひるといへば
ひる、一つの事情より一つのりがなけにやならん、事情の理を
きゝわけにや何度でもおなじ事、とふく處からでゝくる、みな
はなしをつたへ、つまる處はさとさにやならん、いつきいても
おなじはなしやなあときゝとらさにやならん、ぜん〳〵さしづ
に處々たかい處でけるとゆふ、道に高いひくいの理はなけねど
も、心のりにより高いところでける、おもいすぎよりあだとな
る日がある、だんじかけ一時一つの道とゆふ、ほつておかれる

理とほつておかれん理とある、今のふかきとおもうこゝろがまちがう、ぜん〳〵よりふかきりがある、事情を聞わけるなら、みなわかるこれよく聞取て一時の理におさめにやならん。

第　二

さあ〳〵ばんじの處に心をはこべばせかいとゆう、ならん事をしようとゆふてなるやない、なれどならん事でもしよふとおもへば一時なるやろ、なれどつゞくつゞかんの理をしやんせよ、てんねんしぜんの理もきゝわけ、なる處はなる、ならん處をむりにといへば、てんねんとはゆゑよふまい、そこでせつゆふの理も始めにやなろうまい、一寸初代とゆふ、十分たいせつとゆふ理は受取らにやならん、なれどたいせつのりよりたいそふのりになる、とりあつかいかけへだてのりはない事はあるまい、

この道一れつせかいろくぢとゆふ、ぢゆんじよの道たいていは、それ〳〵の理これ一つさとしおこう。

第　三

さあ〳〵事情〳〵、尋る處尋ねゝばわかろふまい、よふ事情きゝとれ、一時充分とおもふであろ、世上ともゆうであろ、なれど教會とゆふわかれとゆふは、十分の理もおさまりてある、さあ〳〵一つの事情もおさめてやらねばなろまい、心では充分たんのふの理はおさめている、つくす一つはこぶ一つの事情に理がおさまらにやならん、十分たんのふして夕景一つの禮をゆふ、たんのふあるかないかは事情でわかるやろ、どふせいこふせいこれはゆわん、よふきゝわけ、道の理理の理、これ一つわかるなら、どんな事もはこばにやならん、ばんじの理はあざや

かとゆふ、どふしてくれこふしてくれはゆうをふまい、一日の日夕景一つの事情をみればたんのふの理は、充分おさめているやろ、これ一つよふきゝ取てくれ。

第　四

さあ〳〵尋る〳〵事情、こくげん〳〵、じゆん〳〵どつからたのみにいかいでも、理をきゝにくる、たかいひくいのりをあらため事情はじめたのやろ、ばんじのところ心おきのふ、これまでの道すじ道すがら、五十年いらいあざやかかきしるし、だしてもださいでもかきとつて一つの理はなけりやならん、だせといへばさいはいである、心おきのふださにやならん、さあ事情はじまる〳〵。

△明治二十五年八月四日（舊閏六月十二日）永尾楢

二郎頭痛し氣分惡しきに付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、身上一條の事情たづねる、ばんじ心にかゝる、いかなるも心にかゝる、よふきゝわけるなら、なにも心にかける事はいらん、よふきいておけ、おなじ一けん三名は三名の心、五名なれば五名の心、一人一つ〳〵の理を受取、あんじた處どふもならん、あんじた理はきいた理はきいたりをわすれる、一けんとゆふ一名かぎりとゆふ、よく事情わかる、身のおこない一寸どふならめん〳〵の理人間たる理をはこばにやなろまい。

△翌日御願

さあ〳〵尋るところ〳〵、一度さしづ二度の理を尋る、いかなる事とよくわかろまい、どふゆふ事をきゝわける、さとするり

きゝとれよ、身上どふゆふ事である、ぜん一つさしづ理をきゝわけ、いつ〳〵事情やあろまい、めん〳〵で身をくるしむりをこしらへ、ぜんにさしづ、一けん一人かぎり理をきゝわけ、これまでさとする理はきいてゆはずかたらず、おなじ兄弟のりもあろ、いつまでどふであろ、世界にたいしてはめんぼくない、おなじ兄弟一けん一人かぎり、是までどふでもいかん、さら〳〵のりをもたず、よくきいたら身上もすみやかなろ。

△明治二十五年八月七日御墓所塚のまわり玉垣の下
石垣積む御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、ぜん〳〵事情さとしたる、しぜんの事情、一時はつこふであろ、事情きゝわけ、ふちこしこれだけつこふ、事情の理さとしおくのやで、てんねんしぜんどんな事もぢよふじゆうさす、これだけたてにやならん、助け一條てんねんで出來てくる、一つちいさき一時の處、そのまゝはじめばくさばへともゆふ、あれはそのまゝならし、事情道は十ぶんにしておかにやならん、どふでもできてくる、年々の理をみるほどに、しんぱいするでない、てんねんの理できてくる理を聞取てそれ〳〵とゆふ。

△おして

さあ〳〵まあおい〳〵、おい〳〵やで、おい〳〵するがよい。

△明治二十五年八月九日夜（舊閏六月十七日）永尾
身上今一段速かならぬに付願

さあ〳〵尋る處〳〵、ぜん〳〵一時のさしづ、身上〳〵一時の處事情すみやかとゆふ、なやみそれ〳〵さづけたる事もありき

かしたるはなしもあれば、一つの事情たしかなる事もわかる、みの處すぐになる、事情に一つの理をせまる、いかなる理とおもふ、ぢばとゆふ一つの理、一つの名がある、そらといへばせかいとゆふ、何たる事情もたずきいたる咄しうちそとの事情にへだてはなし、いんねんとゆふりもある、せまるであろ、ふんばらにやなろうまい。

△明治二十五年八月十三日高安分教會部内和泉我孫子講社内黒鳥村に於いて事件出來、堺裁判所にて公判尙控訴致すべきや

さあ〳〵尋る事情〳〵、一時の處といふ、一時の處尋る、萬事所といへばをしへといふ理がある、その理きかず、あくふうといふしらず〳〵といふ、どういふ事でかういふ事になるといふ、よう聞き分け、一寸には助け一條といふ〳〵、心一つをさめ、さき〳〵の處いづれどんな道もある、どんな道ありてもこれはだいとなるなれど、よう聞分け、これからといふさきといふ、さき〳〵心がある、又道具といふ道具もつてしごとする、ようきゝわけ、何年たつてあんなものいふ事といふ、何年たつてもくさすといふ、年々ある、これまで水の中火の中通らねば、大くわんこされんといふ、さき〳〵こんな事といふなきにしもない、のち〳〵のためする〳〵のため、ふかき事さとそ、心通りわるきなき事は天の理がゆるさん、萬事尋ねて理をさがして心おさめてくれるやう。

△明治二十五年八月十六日（舊閏六月二十四日）

さあ〳〵尋る處、一寸みればいかなる事、是迄の處にていんね

んといんねんとの理をよせて十分、なでさすりするよふに理をおさめ、ゆふ通りにして席がゆふ事はもじる事はいらんで。

△明治二十五年八月十六日（舊閏六月二十四日）

永尾よしゑ身上御願

さあ〳〵一時事情もつて尋る處、身の處とゆふ、一つの事情〳〵、日々とゆふどふでもとゆふ、まあ一時の處願どふり、一日日が長なれば、どふと日々おもう、よう聞きわけ、どんな事もこんな事も世上みてたんのふ、こはき理をみてたんのふ、おそろしい理をみてたんのふ、一時のところどふなろふとおもふ、是はさらにもたず、あきらか一つのりにおさめ、世上一つのりおさめてくれるよふ、さあ〳〵事情〳〵。

△明治二十五年八月二十日寺田半兵衛身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、身上に事情尋る、一つには同じ事情、身上尋る一名一人のりを尋る、同じ一つの理を尋る、心にかゝるやろふ〳〵、なにほどかゝれどもあんじる事いらん〳〵、あんじる事いらんがよふきゝわけ、いそげばいそぐ、何がいそぐ〳〵、とさしづすればどふであろふとおもう、心りをおさめ、皆りは一つのりであろふ、りは一つの理であろふといへば、又どふであろふとおもう、今の一時といへばたるみれど事情どふでもいそぐ、いそけばおくれる、つい〳〵には身がいそぐ、よふ聞わけ、どんな事も皆一つ理をもつていつ〳〵の事ながらへて事情、せへてはたのしみない、ことしにいかねばらいねん、いそいではいかん、かしこはどふみればどふ、きけばどふ、これ三つかならずもたず、日々せいすいのみとして一つ、これか

らとゆふきゝわけ、いそぐ事いらん、あざやかどれからはじまるかもわからん、何もいそぐ事いらんで。

△明治二十五年八月二十三日（舊閏七月二日）永尾

稽二郎身上御願

さあ〳〵尋る處〳〵、いかなるも尋る、ぜん〳〵の指圖一つ事情、又のち一つ事情なんぼふでもおなじ事や、よくおもゑば又かいる、日々たいくつぜん〳〵咄したる處、中々たいそうなれど、ふみとめにやならんからふみとめてある、一つ理なけにやならん、そこで十日とゆへば二十日とゆふ、三十日とゆふ日々むつかしいてならん處、しばらくふんばりたる、一時理があつてはならん、そこでふみとめておい〳〵事情身のところわからん事もある、一時ぢつとふんばつている、こくげんのびる、そこであんじる、それ〳〵とゆふ、すこし理がある、またあすとゆふ、又かゑるよふきゝわけ、もと一つの理大變はこばんなら ん、これ長くもつて一つの理、よふきゝわけ、いたみなやみとゆふ、すぐといへばすぐおさまりたる、またあちらためやこちらや、是迄とふりたるなれどわからにやおぼつかない、おもうみればわかる、きけばわかる、あざやかあんしんなものなれど、一寸わからん、一寸たてよふたる理もある、さあとゆふたらさあ、こふとゆうたらこう、さとする理よくきゝとれ、よき處の理はおさまる、これおさめるはりなれど、わるき處おさまらねばならん、わるきおさまれば十々のり、さあ〳〵一人のためじやないで、みな〳〵十々の理にさとしおく、これよふきゝわけてくれにやならん。

△明治二十五年八月二十五日寺田半兵衛家内中の處
此度教會御道の爲他の處へ移轉の御願

さあ〳〵事情もつてたづねる處、一時に一つ理を尋る、それはだん〳〵日々の處、何程の處どれだけべんりがわるいといへどながくみなよりあつまる處、なじみ一つ理がある、さあはこびがたない、とりにくい、一つには、内々今迄のところかゑて一つをもわく、事情の處ゆるしおこう、おもわくつけこゝろどふり、事情はおい〳〵おさめする理おさめて、心おきのふかはりておもわくどふりまかせおく。

△明治二十五年八月三十一日午後九時三十分刻限の
御咄し

さあ〳〵〳〵〳〵、一寸咄しかけるで〳〵、さあ〳〵やれ〳〵今年〳〵のとしもなにかの事情もつとめきり、長々の事やきいてしつかり筆とれ〳〵、こくげんこれまで咄しかけたる處、これまでと引くらべて、一つ〳〵はじめかけてくれ、これまでなんべんさとしてもおふかたこれであろふか、日限をくれてある、おい〳〵こくげん事情さとしてある、よふ〳〵年限事情さとしある、これまで刻限事情をさめきたる處、これからおさめころりとはなしかはり咄しかける、半年さそふ日々の事情、はこぶ日々の處よりくる世界の事情、おふくの處みな事情ある、これこれまでなんべんはなしつたへてある、おふかたこれでありろか一つおいのばし、これまでの處第一ふせこんだる事情、一つ〳〵きゝわけ、これ事情みなはなしやい、はなしおもふものはくむよふなもの、あつめりやしるしどふりみなくめる、しる

しがわからねばなにほどさとしてもなんにもならん、しるし日々さとし、これまであと〳〵おそろしいこはい事情あつても、年々しるしをうつてほどき、又くみこれから今はよいとゆふ、一つしよふこよいはよいきげんで御禮申てくる、おふくのはなししてあそんでいるやいなや、たちばんするとあつさであろふかとおもうしろうまいわかろうまい、出てはなしすればわかる、おなじ事ならばしるし一つうつてくれねばならぬ、席とゆふどふゆふ事もおふかたうたがいない、一年そふのりがある、年限そふの席に理がある、これまでつかいはなし、席とゆゑばなんでもないよふのもの、日々たいせつとゆふはこれは受取る一つはなしかける、ゑらい事ゆいかける、一つ人間心でゆふのであろまい、五年以前からみれば席一つさしづで理をみ一つの理をあらため、早々かゝらねばなろまい、これまで十分日々たんのふはおさめている、ふしん何年ちうかゝりおふくの中の理であろふまい、一人二人の理で立て田の中へしよんぼりと立て、席の十ぶんみる處一つの理である、國々それ〴〵事情教會や支教會や、派出所や〳〵、日々尋ねかけてその中に一つのしんどとゆふであろ、一時ばんじ一つよふきゝわけてくれ、世上國々一つおさまり、一つの理であろふ、地場へたちかへり一つの事情わかるであろふ、これ一つきゝわけてくれ。

△又引つゞき御咄し

さあ〳〵又々でるで、どふゆふはなし、身上からは咄かける、どふゆふ事も身上から咄しかける、半年事情いつかぞへる、幾日やすみ、それ〴〵しだいをとり一つのはなし、半年よふ〳〵

きた、いつ日のあいたやすみ、それ〳〵かゝりたる、やすまにやなろまい、事情はなしておかにやなろまい、どうゆふ事せいてくるやろ、十日いつ日やすみいたならきゝたい、それ〳〵事情もつていつた處がとりあつかいしてもらう事できぬ、夜ともゆはんひるともゆはん、尋ねかけゆるしおく、又たづねそう〳〵けふは一日しもうた、たのしまにやなろまい、何時なりとどんな事もさしづがよかつた、身の處はつさんこれ一つきいておかにやならん、又一つ咄しかわる、一年中あついしのぎにくいしかける中に一つじやまや、年限一つの理をみて尋ねやい、一つ受取、さとりは日々受とる、はなしさへ刻限の理そのばたつたらそれぎり、刻限つゞいてはたしてくれば又あと〳〵、今一時席一條、さき〳〵のくもるくもらす、席一つの事情口をかつて心はからん、人間ごゝろ一つももたず、おいのばししてきた、一時間のあいだ、あい事とい事事情から刻限事情いそぐ、又夜る〳〵その日〳〵一日とゆふ、刻限できる、みのがしきゝのがし、しるし刻限とりこして、萬事一つの理きゝわけ、萬事事情ほんにことばをかつて十分といへば十分、十分でないといへばこの道ぜひない、五年以前どふなろこふなろと、それからなるほどの理をきゝわけ、こふゆふ處からきゝわけ、あつさもすゞしくなる、一つの事情聞分て日々ぢゆうようかゝつてくれよ〳〵、だんじ一つまことおさまるである、ふつごうでならん、あちらこちらで事情、ゑんりよきがねも事情きゝわけてふつごうあるかもこの事情きゝわけてはこんでくれ、三年五年以前きゆそく所、一日つかう〳〵、みなつかい、ふるやかた〳〵

となつてある、席一條理をかんがへ、あそびは又一つのはなし、一時はなしなにもかもまんぞくすつきり此間、これまでどれだけよふにたてたであろう、だん〳〵の理もせへてかゝつてくれ、又だんじやいしてはなしがあはねば、又うかごうてくれるよふ、いそいではこんでくれねばならん、しつかりきゝ取てくれるよふ。

△明治二十五年九月三日御伺前刻限事上より談示御

本席様宅を建築に付役員集會の上、會長様の御許を請け談示相定まり地所の處は裏手の數の所へ御許被下ますか御願

さあ〳〵しゆんをもつて咄しかけたら、だん〳〵だんじたづねやい理をあつめる、事上はじめかける處だんじ一つ席とす、どふがよかろこふがよかろといふ理がおさまれば充分である、なれどもと〳〵おさめたる一つかゝり、理をつくりかゝり、屋敷だん〳〵一つ心、だん〳〵理をさとしたるところかんがへ取扱尋ね、なんたる理よりはじめかけたる、一つの理おさめにやなろうまい、一寸はじめかけるところ、どちらよかろふ、おうかた裏と表とさとしたる處、一つ取扱事上ある、談示できるできん事情一つこゝろおきのふはこぶなら萬事おさまる、一つどふであろふこうであろ、こばむとゆふしん一つさしづ、ふまんといへばわからんよふになる、かへし〳〵のさしづはいらん、ゆく〳〵といてあるところ、これまで一つさとるなら萬事あざやか一つの理がみなわかるであろふ。

さあ〳〵でかけたる理、これ一つ心に理をよせて、これまでた

いそふ一つの理がなくば萬事一つの理におさまる、どふであろふ一つわかればみな咄し通り理がおさまる、とめるにもとめられん、人間ごゝろさら〳〵いはん、しゆんにかゝるならみなゆるしおく。

△明治二十五年九月三日光原菊太郎三十九歳身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いかなる事情も尋る〳〵、どふもこれいかなる咄しをきゝ、これまでさぶし日々年限みてあら〳〵おさまれば、あちらながめばどう、こちらながめばこうと、一つ理くやむ、くやむ理はさら〳〵いらんで、身上大變なる理であれど、一寸ふんばりたる、いそいではいかん、はやくさとしてくれ、どれだけいそいたてなるものやない、おくれたがおくれたにならん、年限きたればすみやか理治まる、これ事情はやくとりなをしてくれるよふ、はやくさとしてやつてくれ〳〵。

△明治二十五年九月五日御本席様建家の問數の事件

御願

さあ〳〵だん〳〵の咄しをよせる、日をよる理をよせ、理をあつめたる處、一時の理を尋ねる、建家とゆふて尋る、建家まづ一つどふゆふ事がよかろふと、一つ尋ねたら事上さしづあろふと尋ねる、尋ねばさしづせにやなろふまい、どふゆふさしづもまあ一時どんな事もかりやとゆふ〳〵、しばらく年限の間みなかりやおもわく事情、さき〳〵の事情およぼさにやならん、一寸かゝり始めかける、かゝりかりやだちやとゆふ、まづひろくとゆふ、廣くといへばどのくらいとさあしる、たちやがひろくに理があつまるとさしづしておこう、あちらへどふしよふこち

らへどうしよ、どこがふつごうどちらがべんりやと、さら〳〵もたづ、かりやは今たゝみあすとりてもよふきゝわけ、大き一つひろく一つおさめばどんな事もおさめていく、たいそ〳〵かさなればどふもならん、樂みとゆふ心もつていさんで一つはじめかけたらさしづどふり、あざやかなる、一時治める處どれだけの事せにやと治めにやならんとゆふは十分受取るこゝろ大層事上をもはず、でけるだけの事はせにやならん、又おい〳〵の咄し、それ〳〵これだけの事上、だんじ何が理をもたず、これだけの建家坪とゆふ、事上はいかゞなりとゆるしおこう、ゆるしおくはあたへとゆふ、よふ聞わけ、一人一つの心日々の理をもつてあたへとゆふ、日々の處これまでわからん處、それ〳〵道をかためになるほどの理を治めてやらにやなろうまいと、心おきのふなるほどの理治めてたちやはひらや、にかいはいらん、たちやはひらやに、ひろくとゆふひろくとゆふは心の理がひろくやで。

△今日石出しに付瀧本道作り御願

さあ〳〵一度は尋る、一つの事上處にて一つはこぶ事情であろ、なんでもかでもはじめかけたらはじめにやならん、はじめてよふいなる理ならんやない、尋る處の事上一時心おきのふかゝりてくれるがよい、さあ〳〵許しおこう〳〵。

△明治二十五年九月五日（舊閏七月十五日）永尾身上の處で有ますが奈良糸の處こちらへおさまり被下ば永尾の身上宜敷御座りますか其外にはこばんならん處ありますか

さあ〳〵尋る處〳〵、どちらの身上とゆふ、こちらの身上とゆふ、一つたいへんなる處をはこび、日々大いにこまるなれど、丁度さしづもつて事情とゆう、どれだけの身上といふ、ぜん〳〵どれだけの事情しばらく治る、わかきいたりとゆふ、きまりなきことばをつくり、とんとどふもならん、だん〳〵理がかさなれば理がゆるさん、身のなやみ長く事情たいへん事情、一人かぎりやない、それ〴〵いくるのはなしさとしおいてくれにやならん、どんとなりきりてしもたらどふもならん、一時どふなりふんばり、又さきとゆうはたのしみ、すつきりさんげい、あと〳〵咄しのためのちのため、日々の處事情さとしてだんじてくれにやならん、一時の事情おさめかけたらおい〳〵おさまる、一つおさまれば又おさまる事情さとしおこう。

△明治二十五年九月十一日御教祖樣御改葬に付御輿の處四方みすに致度につき御許下されますか御願

さあ〳〵だん〳〵おい〳〵理を以て尋る處、一つの事とゆふ、又一つにはどふよこうよ、しやんあろ、一つ尋る一時さしづおよぼ、それはどふとこのまん、一つこゝろだけゆるしおこう、一つはなしする、わからんからおよばん、又一つおい〳〵さしづもつて尋ねにやなろまい〳〵。

△明治二十五年九月十七日御墓所門の處御伺ひ

さあ〳〵尋る事情〳〵、大變なる事情である、事情はそれ〴〵おい〳〵おもはくより一つ、一時これで一つとゆふ處、尋るかゝりかけたる、おもいたる處ゆるしおこう、さあ〳〵ゆるしおこう〳〵。

△同日改葬の御輿二つ造る願（内一つは御教祖様一つは中山家祖先の輿）

さあ〳〵尋る處〳〵、一日の日をもつて事情とゆふ、さあ〳〵尋る處〳〵、萬事事情尋る處、いち〳〵尋る處、こふとゆふ處理あつめて事情受取、又一つにはたに事情よせ一つ事情これも受取、のち〳〵の事情おさめにやならん、一日一つ尋る、これから何度も尋ねて日々はこばにやならん、一時の理におさまる、一時の理が一時におさまる、又々の理にこれもおさめにやならん、事情なんぼかさなりたるともわからん、ゆるす一つのりとんとはかりがたない、二度三度もつて尋ねばしよふがいのりはなし定まりたる、これほつておけよふまい、一つりははやくりをもつて尋る、事情は心だけゆるしおく、何かの事かゝるとゆふ、しやんもつてさいしよ〳〵こふとゆふはだいである、どんな事したて心おさまらねばふは〳〵して、ふは〳〵したことはどふもならん、そこでかたるはなしよふて、心おきのふ萬事かゝる、尋る處こゝろあらつてかゝる、一つまちがわん事とふればかたまる、かたまりの理は世界とゆふ、どんな事せへとはゆはん、なれどさしづとゆふ理、たがはつてはならん、これ一寸さとしておこう。

△明治二十五年九月二十六日寺田半兵衛是迄の居宅にて商業致居處職場を新喜多新田へうつし、娘たき孫眞之介又おこう三人のもの家うつり致候樣夜よりこふ眞之介兩人せき出候に付御願

さあ〳〵尋る處、いかなる事である、どふゆふ事であろふと、

さら〳〵もたず、よふきゝわけ、あんじすごせばあんじる、きりがない、身上あんじる事いらん、一時の處とゆふ、一寸にはこれではなあと思ふ〳〵、一時しばらくふじゆふ事もある、さぶしい事もある、これはさら〳〵もたず、どふゆふ道もある、事情かさなり、又かさなり、事情たのしみとしてある、あんじる事はいらん、しばらくふじゆたよりなきとおもう處、とりかへおさめぼおさまる、一つのりにあんじなきとさとしおくとゆふ。

△明治二十五年十月三日午前二時五十分刻限の御咄し

さあ〳〵一寸はなしかけるで〳〵、ぜん〳〵一日一寸一つさわりおふきい さわりならわかる、さあ〳〵朝一席三名の中一つ一時の處もふ一時こゑがとまる處、そのばをとふりわかろふまい、一席只一名もこゑを尋るものはない、一寸二三日あさより三名の中こゑつゞかんよふになる、つゞいて三日つとめさしてどふゆふ事こうゆふ事、こゑがつゞかん尋にやなろまい、こゑがとまる、一寸朝三名やくをとまる、三名中こゑとまる、なにほどでもこゑがとまる、日の中はあちらざわつきこちらもざわつき、一寸はなしかけるで、なれどもよんどころなくしらさにやならん、これじつもきゝわけいかなる咄しむつかしき事せへとはゆはん、どうゆふ事もこふゆう事もなんにもない處からさわる、そや〳〵風はこゝろがよい、世界日々くらす、同じ風でも大風はそれ〳〵こまる、かはい〳〵かはいくあつて、是迄そや〳〵風は秋風、そや〳〵風で大風はどちらへにげる事もできぬ、一時の理わかりがたない、一寸の道なみたいていの道やあ

ろまい、萬事一つのはなし一つの道は今一時とはゆはれよふまい、もふ一人三名こゑのとまるをみている、よんどころなくである、いかなる事ならんしらさん、此道はたのみあるく道じやない、事情理の世界人間心事情よふしやんして、又々はなしやい、たがい〳〵いかなるはなしさとしあふて、ひろく事情はなしかけてくれるよふ、刻限はなしはちがわんで。

△明治二十五年十月七日御本席様身上御願

ならんで〳〵、そら尋るまでや〳〵、身上から刻限でたもの、なにも尋る事いらん、刻限からできてきた、皆あいもんしるしうつてきた、みな一二三四のしるし一つちごふたらくんでいかりやせん、西は西、東は東、北は北、南は南、ちごたら西は東、北は南ごてになりてくまりやせん、みなみとふしてつけてきた、刻限でしらしたる咄しのつたへからかんがへてみよ、むりな事むりにせへとはたゞ一つもさとしてない、できん事むりにせへとはゆわん、日々身上せまればみなはこんでいる、はこべなんだ事なら一もとらず二もとらず、刻限咄しよそにきゝ、人間心をめん〳〵だしてはこんでいる、日々取あつかいもほつておき、一寸かゝりてくれば一寸、ひらきて〳〵くさぶるでよいとゆふてある、刻限さとし聞かぬよふになりたら何もきかぬよふになる、あちらもはんぱや、こちらもはんぱや、天然しぜんの理もいくたびもきかしたるやらしれやせん、たいそたいぎな道やあろまい、一時の道やない、一寸にでける道やない、今夜いてはなしきまつてこい、席の處へいたらこふゆふ事きいたと一つきまりとりて、一つの理そのよふにそないにない、さと

してゆいつけてするはみな受取、みなかつて出してみなはたらいているのやで、みなたのしんでせにやならん、事情であろ、ゑらいとおもたらちがうで、日をかぞへてみよ、幾日〳〵あるぞ、晝夜ともはたらいてもいつ日あるぞ、みなかぞへてみよ。

△明治二十五年十月十二日梅谷四郎兵衛家内おたね

目のさわり御伺

さあ〳〵尋る事情〳〵、身上に事情ありてみな尋る、何もこれあんじる事いらん、あんじる事いらんがよふ事情きゝわけ、どんな事でもみのがし、きゝのがし、いかん事情たがいはこびやい、みちついたる、よふきゝわけ、事情はさしづどふりの道であるで、さしづ通りこれまでみな尋ねて、是迄事情尋ねてこゝろをさめばあんじなき事情である、これ一つよふきゝわけ、それ〳〵とりあつかふ中に、人々のこゝろある、又さいしよふとゆふ、又とふりて一つの理もある、どんな事もあり、ちかくはゆうまで、とふくこゝろとゞくよふ、これ事情にこゝろおさめてくれにやならん、めん〳〵こゝろゑん、一時とゆう處ある、みなおい〳〵あちらこちら、身にさとりてこゝろへん、こゝろゑん事情はけん、事情はけんと身にあたはん、あたはんと身にさわる、これ一つきかそ、これよふきゝとりてよふがおふなる、せわしくなる夜やひるやわからんとはなしかけたる、はこばにやならん、あんしんたがい〳〵つたへてたのしみ、皆つたへてくれにやなろまい。

△明治二十五年十月十四日夜御本席様身上御障りに
つき前御指圖より申上願ふ積りで一言申上かゝる
處へ

ならん〳〵すつきりならんで〳〵、同じ事や〳〵、けふの日をみて是迄の日をみて、それから〳〵せいじん〳〵、せいじんの日をあらためてみよ〳〵、今日の日なら是迄今までは是まで、けふの日のいつからぞ〳〵、かぞへてみよ、今の日わからねばいかせんで〳〵、今日の日の事情ならどんな事もかまわん、あんじなき事ならかまはせん、今日の日じやまになるのやろ、じやまになるならどこへなりとつれていくで、どんな事でける、でけんとゆふ事、どんな事もかぞへてみよ、もう身上すつきり〳〵身上すつきりやで、すつきりしてしばらくの處つれてあるく、何にもかもおもてみよ、元しやんしてみよ、日がらの日をみよ、理をきゝわけならん事せへとはゆふやなし、みていらりやせん、理としてみておけん、ほつておけんとくしんさゝにやならん、人間こゝろある、なんてすいしてあるかないか、理としてすてゝおけん、きよふから一時どうせいとゆわん、それ〳〵せかい事情しやんある、なにかしやんして何か事情をおさめてくれるよふ。

△押て相願の上御願申上ますから他へ御出まし下さる事は下さらぬやう御願申ます

さあ〳〵尋るさとしよふ、咄しあつめる〳〵、どんな事どんな中こんな中でけるでけんこゝろおさめる、何たびはこんだと一人事情からどんな理はつしるやらわからせん、そふやつしそふ

もたれ、神の屋敷神の道神のしはいこれきゝわけ、人間心ゆふやないきくやない、これだけさしづ一寸しておこ。

△明治二十五年十月十四日寺田半兵衛娘こう二十歳
孫真之介七歳兩人身上障に付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵身上どふでもあざやかならんとおもふ處尋る、あちらがどふであろう、こちらがどふであろふ、一時わかろふまい、一時きゝわけにやわかりがたない、一つところいつ〳〵までとおもふ處、一つあちらへわかれみなおもう、よふきゝわけ、處をかわりて身にさわるとはさら〳〵ないで、これだけはなさんさとし、理をみてこゝろにかゝる處さらにない、さしづさとりまちがいとおもふ處理であるなれど、世上一つりみにやなろまい、一時たいへんとおもう、しばらく道であろ、いんねん理であろ、めん〳〵一時世上理にもたづ、さき〳〵理がさかゑはりてある、道あんじはいらせん、一時の處たんのふはでけにくい、さき〳〵あんじなきときけばたのしみさだめにやならん、これだけさとしておこう。

△明治二十五年十月十五日夜御本席様御休息所普請の事願

さあ〳〵よく〳〵事情〳〵、事情始めて咄しかける〳〵、理がわかれば重々の理にさとしおこう、おい〳〵はなし刻限の咄しこれまで中にありたであろふ、一つはどふでありた、こふでありたと、むつかしいならん、道一つふみこめばあとへよるにられん、しやんありたであろふ、一つせいしんをこるともあり て人々の事情何もかもはなし、咄しはどふであろとわからん事

はこたへ、事情はこたゑてこたへるは神のさしづである、さしづは一時もすておく事できがたない、よくきゝとりてくれ、一寸刻限きゝとりてしゆんをあらためば理である、事情一つはなしかける、又咄しかけるで、長く理である、さあ〳〵元をきかねばわからん、一時道ではないみなそふやつし、けつこふみればあたりまへ、けつこうわからん是迄ふるき道わからん、つくすよぎない事情とりてそこで理があわんとおもへばこたへ、刻限まちがわんなれど、こたへる理がない、かつてよい理によつて、かつてのわるき理はよりにくい理であろふ、かつてのよき理はおかん、此道ではよりぐいよふよう親とゆふ理わからねば何にもわからん、よりくれば尋る、尋ねかけたら普請一條尋るであろふ、指圖にはいくゑどうぞしてくれとはゆわん、十々は

こんでくれ、これから咄しかわるで、席とゆふ席一條たのんだ事はない、日々はたらきどうよふ、けふの道はどうゆふ處からでたか、かんがへ理がよりてたがい〳〵つくしての理である、神の道でこそつくす、つくすだけのあたゑとゆふ、是一つ聞取てくれ、それから又かわる、ほつておくほつておかんはゆをふまい、日々あちらこちら用がたてあふから、とゞかんのやろふ、そこへ〳〵とゞかなんだ、なれどたつた〳〵一つの理おなじ理、これわからん〳〵、どふゆふ理ならけんぽうはつぷゆるしたかぎりの理、よくきゝわけわかるかわからんか、こたへをせよ、一つはこたへてくれ、こたへなくばだん〳〵はなしにかゝる、よりあふてとふく道もあればちかくもある、きくもあるとふく咄しきゝとりて、一時に聞いてよるは神やしき、元一つ

ありて世界、せかいからとゆふ。

△明治二十五年十月二十日寺田半兵衛娘こう前々よりだん〳〵障りおもり候に付又候御願

さあ〳〵身上一條理を尋る、だん〳〵の理をもつて尋ねかやす處、一度指圖とゆふ、一つおさめているか、いかなるもあらためて、内々これまでつくす、はこび、なみたいていな事でない、何たる處とふりて一つ又候、どうである、一度思ふはよぎなく理である、よふきゝわけ、一時理の處何時ともわかりがたないとゆふ、一時とゆふ事情である、むつかしいとゆふはつさんでけよふまい、いつのたづねはなしとはぜん〳〵さとしたる處、ながらく日あいたさとし、さとしたるどふなる事であろとゆふ、月々年限たつたる處、一時身にせまりてどふゆふ處、な

るもいんねんならんもいんねん、これきゝわけ、ぜんに一つ又一つかさねて一つ、たちこして又候さとしはかりがたない、なれどよふきゝわけ、今一時の道ではない、今一日の處うけとつて十々とゆふ、まあ指圖とゆふもつて一つあきらか、あきらか中に一つ事情、せゑかくと思へども一時なあ、又ところかへてどんと一つおさまり、萬事の中いさゝかおもふやろ、内々これまでおもへば理や〳〵、世界の事情にはいくゑにもある、あんなおしいなあ、あらうちじやとゆふ、あんななああらありうちじやなあとゆふ、これよふきゝとれ、又道とゆふかわりた理さとしはこぶ、このいんねんきゝわけ、内々であろ、又候なんたる理あらありうちじやとゆふ處きゝわけ、道々の處はこぶ處によつてほんになあとゆふ、これからきゝわけ、一時こわいよふ

なるもの、こわい處はこわい處の理はこび、あぶなき處はあぶなき理はこび、何ともなくば何とも思はせん、どふゆふ處きいたる、きいたる處どふである、それ一つこゝろにきゝわけ、ならん事情中に一つ、これまではこんだ中、十々うけとる、たゞ心にどふであろふとゆう處、よふ事情きゝわけ、あぶなきはあぶなき、十々心にもつておさめにやなろまい、しつかりきゝとりてくれるよふ。

△おして身上の處はどうで御座りますか

さあ〳〵尋ねかやす理までや、よふ事情きゝわけにやどふもならん、事情さとす事でけよふまい、人間心にさし入りてよふきゝわけ、こうとゆへばこうの理がわかる、あきらかとゆふあぶなき處の理はあぶなきり、心にもつてさとすとゆふ、あいそつかしのりはさらになないほどにさしづしておこう。

△明治二十五年十月二十四日夜刻限の御咄し

やあい〳〵〳〵〳〵、さあ〳〵こくげんにしらしおいたる事情はよふ定めにや、道おくれるで、さあ〳〵どんな道すじ日があるやらしれんで、一寸しらしおく。

△又しばらくしての御はなし

やあい〳〵きいてくれやい〳〵、うん〳〵〳〵〳〵さあ〳〵はじめかける〳〵、さあ〳〵まあ〳〵たいへんなる事〳〵、もふはじめかけるたれかゆふよふ〳〵、西、東、北、南、中に西にもあり東にもあり、北にも口あり南にも口ありさあ世界一度にうつる、何がうつるやらしれん、何がうつるやらいかなる事も刻限にしらしてある、これようきゝわけてくれ、これよふしやんす

ればみなわかる、刻限にしらしおいたる、これきゝわけ、理をはこぶきゝわけ、一事理に定めにやならん、なんでもないとおもへばなんでもない、これよふきゝわけ、刻限の理にしらしおこふ。

△明治二十五年十月二十六日墓所の建物三間半四間にする願

さあ〳〵尋るであろ〳〵、まあ地所一つとゆふ、これだけとゆふ、わづのばんもでけよふまい、むつかしい心あれだけはこんで事情おさめるからには、晝夜とゆふ建家とゆふ處受取、一はんぜんたるこゝろ、づうと下の處にてはれ〴〵しい事いらん、雨つゆさへかゝらぬよふにすれば、何時でもかゝるがよい、心おきのふかゝりてくれるよふ。

△明治二十五年十月二十六日御本席様御用所の建物六間程して夫より地所廣くして致度につき御許被下か御願

さあ〳〵尋る處〳〵、さあ〳〵事情はいくたびのはなし、さとしはいくたびのさとし、さあ一日の日をもつて尋る處いくまとゆふ、幾間一つの理をさとする處、よふ〳〵さとり〳〵、どふゆふさとり、さとりやあろふまい、きゝわけたらわかる、一時のことばに一つの理があればいかなるもかきとりて、一つ〳〵咄しかけたる理あはせ〳〵建家にさしづいかなるとおもふ、よふいなる理でおろふまい、咄しかけたる理がある、その理から萬事一つの理がおさまる、さあひろくとゆふてはなしかけたる、心廣くば萬事ひろくとゆふは、わかろふまい、廣くとゆふ

ひろくにはふそくとゆふ理はあろふまい、どれだけひろくともわかろふまい、廣くとゆふは心の理がひろく廣くがたのしみ、たのしみがあつて廣くとゆふ、なれど心に一つりがありては廣くとはゆわん、さあいくまなんまとゆふて事情尋かける、よふ事情きゝわけ、ぞんめい中の事情からさとしおいたる處のりかんがへるが一時の理あざやかとゆふ、ぞんめいでおる理をもつてたのしみはたんのふ、たんのふはことばでわかる、咄しおふてわかる、かけよふてわかる、此世すぎたる處きゝわけ、又一つ事情きつてはなしかけるで、よふきゝわけ、いく間とゆふ理をきつてはなしとゆふは、存命なら存命の理をもつてうれしい心の理をとりむすんでの理は十分うけとる處、よふきゝわけ、この世とゆふすぎたるとゆふ〳〵、かたるにかたる事できよふまい〳〵、一つには事情席一條さとするりは存命一つの理とゆふ、一つわかるかわからんのこゝろこらしらん、一時さとす刻限事情でさとしたる處、これ一時かたまりたる處、みないさんでとふればあぶなきはない、なれどはあと思ふてはあぶない、一時心をしずめてはこばにやならん、一時にしあげて一時にどふとはいらん、みなよりたる一つの心一つの道、この處によふとゆふ理がある、一つおくれる二つ三つおくれる、よふきゝわけ、幾間なん間とゆふ、これ存命は存命一つの理によりてさとし、あんしん事情は二度と尋ね、三度四度たづねでと、さしづしておこう。

△明治二十五年十月二十七日寺田こう身上障りに付
園原に預け有おなを國太郎の兩人をよびとるに付

梅谷たね迎へにいて被下連れて戻り其後で梅谷氏
歸會の節の御伺

さあ〳〵ながらくの道中みちとゆふ、一時どふゆふ事になろ、みなそれ〳〵とんとあんじ心はこび、たづねぜん〳〵もつてさとしたる、事情一時おさまる處みて、おさまりあればさとし通り、三年とさとしある、一寸でかわり處にて三年とさとしある、一つおさまればみなおさまる、三年さとしの事情、これわかれば何も思ふ事ゆふまでとさしづしておこう。

△明治二十五年十月二十八日松本はる身上御願

さあ〳〵身の事情尋る處、一時の處はもふ事上にてはよほどせまりてあるなれど、一時どふではない處、早く事情はこんで一日二日三日とこれ事情きかし、心これまでつくす處は十分の理

である、なれど一日二日三日とかわり〳〵さとしてはこんでやりてくれ、一つはたんのふさしてこれまできかし、一日の日うれしい日重々さとして、たがい〳〵これ一時どふゆふ處、とふい處たより一時定めてながらくてこれは受取てある、ほふとおもへばほふと重々諭してみなかわいゝとゆふ理もつてやりてくれるよふ。

△明治二十五年十一月八日教祖樣御改葬當日は二十五日に致ますか二十六日に致ますか二十七日に致ますか此三日の内幾日にして宜敷哉

さあ〳〵事情尋かける處〳〵、どふで一度や二度でおさまろまい、一時尋る處なん度の處、日々の處それ〳〵つくしての處、ぜん〳〵もつて事情はこばにやならん、よふきゝわけ、一日の

日はたいもふなる事どふも事務とりにくい、そこでぜんもつて事情さとしおかんならん、事情はずいぶんひつそ、ひそかにして大へんな處ひそかおだやかにして、大きな事したとて大きな事になるものやない、ひつそでもりがいつまで何でもひつそならつくす處は受取、一時大ぎよは大そふになる、大そふは受取れんとさしづしてある、そのこゝろにもつてあつこふてくれるよふ。

△押て前もつて仰被下は二十五日に致事で有ますか

さあ〳〵前日事情はこんで又大祭とゆふであろう、それ〳〵多くあつまる處たのしんでもどる處、一日の日大變事務とりにくい、一年大祭とゆふて治めてくれるよふ、又どふであろとおもへば又尋ねて一つ理とゆふ、これ二つにさとしおく、たにこふとゆふ理ありやとりけせん理もある、なれど一日の日大もふ事務とりにくい、そこでこれとたのしんでしてくればどんな事でも引受るとさしづしておこう。

△同日御改葬の當日巡査三十名警備の願

さあ〳〵また一つ尋る處、事情のりによつて一人より二人二人より三人、目のとゞくだけしやんとゆふ、これはさしづまで、これだけの事ははこばにやならんとゆふ、何も一つまかせおくによつて心おきのふはこんでくれるよふ。

△改葬通行道路は守目堂池を西へ下り丹波市に出で上街道を北へ進み田部より別所に登り新墓地へ至る迄處御許被下ますか御願

さあ〳〵道すじ事上尋る〳〵、又一つには大くの處あちらへ事

上こちらへまはり事上とゆふ、これは事上多く人ならどふもほそく道あゆみにくい、大く中思ふ處遠くところまはるとゆふ、まはれば又ぜん心はこばにやならん、まちうけての處あれば又いや〳〵りもある、そこで一日の日なら事の理はこんですればとふるにとふれん事はない、どれだけの事とゆふこれだけまかせおく、これ一てんさしづまでこれしよふがいの理ならどんな事もまかせおく。

△送葬の時御本席様御送被下もので有ますか御伺

さあ〳〵又一つ尋る處〳〵、もふ席とゆふて定めかけたる、そこでへんじよはこぶまで、ぜん日からじいとして心にしつかりおさめおかんならん、どこにどふしてくれるどいなあとゆふよふにしてとりあつかいしてくれるやう。

△明治二十五年十一月十一日舊十月二十六日は教祖
様改葬に付其前後分教會所月次祭の處前日に勤め
濟まし度に付事上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、ところ〳〵とゆふ、それ一日の日定めたる、又一時事上によつてこふと尋る、それはだんじの上といへどさとしよ、亦ぜん〳〵事上はこぶ理、十月七八分ひける、其日でけるもでけん處とある、いかなるもぜん〳〵に早くつたへておくがよい。

△明治二十五年十一月十六日寺田半兵衛眞之介身上
に付せき出でだん〳〵せまり候に付母たきの事情
も申上げ

さあ〳〵一時の理を尋る處〳〵、小人とゆふいかなるもよくき

きとれよ〳〵、まあ〳〵内々の處にてどふも何ケ年の間〳〵、ながい間〳〵、一時のこゝろゆりたる處、しばらくもなく、世界どふであろ、くらすよく事情きゝとれよ、むつかしい道であろふ、どふもならんみち、小人身上だん〳〵もう日々とんと一つおさまりておさまろまい、内々おさまろまい、内々こふとしやん、よりでる〳〵、おもわずあれ〳〵とこせばたのしんでなるほどゝゆふ理、しばらくいばらぐろたのしんでこしたら、これだけじつと内々もちてどふもおさまろまい、日々あんじ〳〵の理なるほどおさまろまい、なれどとふるだけの道こさんならんのかいとふゆふりも心におさめてくれ、もふ一つ二つおさまればさき〳〵あきらか一つ日とゆふ、これ一つさしづしておこう。

△一つ二つと仰被下實に眞之介身上の處如何で有ま
すか御願

さあ〳〵いばらぐろの中や〳〵、今の處こすにこされんとゆふ處なれど、こすにこされんところやないで、何もあんじはいらんおさまるで。

△明治二十五年十一月（舊十月一日）午前四時刻限
の御はなし

さあ〳〵これ〳〵何を尋かけよふとゆふて一日と何を尋る事ばかり、一寸どんな事尋ても刻限とゆふ理をしらしたる、くはしい〳〵刻限、身の内くるしんでいる處をみよ、尋るはしんどの上にしんどをかけるよふなもの、刻限とゆふ事情なをしておいて、人間心でなんにもならん事にめをほし、ア、めがくたぶれ

た何もならん、刻限事情一寸もちがわん刻限なをしてしまい刻限みのがし聞のがし、子供のする事親は今迄みていた、聞ていたなれど、人間心の理がさかへる、それではみていられん、刻限をだいとして始めた道、一名ともゆふ二名ともゆふ、又それ〴〵ともゆふ、刻限をよふしやんせよ、それをなをしておいて何にも尋る事いらん、日々ではいりくるしんだ理で、どこへいこふが結構な道が一寸つけてある、一つの理をたがい〳〵きゝわけるなら、ぢゆふふよふとゆふ、是聞分にやならん、ぜん〳〵刻限どふゆふ事であつた、是事情聞分十分の道、九分迄の道につれてのぼりた、もふ一だんゑらいむつかしい道がとふりかけている、めん〳〵こふせにやならんどふせにやならん、みなだんじよふた處が、何にもならん刻限の理をはづすならつくすまでやワア……。

さあ〳〵どれだけゑらいごうきごうけつ、ちからつよいとゆふたてはいるやいなや、一寸はづれてとふる、めん〳〵心でおしてみよついてみよ、たかつてみよ、さはつてみよ、どれだけのものでも身の内かりものとゆふしんがわからねばどふもならん、一寸はつれてとふるなれど、ぜひ〳〵の事情なんたる事とはさら〳〵をもうな、これを見てしやんせねばなろふまい。

△明治二十五年十一月二十一日御本席様腰のいたみの事情御願

さあ〳〵尋ねにやなろふまい〳〵、時々の事情さとしたる處、尋にやならん、身上事情せつなみ事情よふきゝわけ、まあ〳〵一寸にはわかろふまい、なれどよふしやんすればわからんやな

い、さとしたる理どふもかんがへる、事情こゝろにさら〳〵もたず、ほのかなものとゆふ、時々の心をさとればわかる、萬事の處いろ〳〵の事情もあろふ、おふくの理もあろ、せかいともゆふであろ、なれど存命中一つの理まつ代の理を見定めて、理をはなしたる道あらためかへるとゆうた、今一つの道存命中みなさとしたる、ころつとかわりて席とゆふ、存命中一つのりとさとしてある、いつ〳〵きゝながし、みのがしさとしとはおもわれん、あらためてみな心一つこれ一つ事情きゝとつてあらためめ、一つの理を定めてくれにやならん、日々あつかいこれの理にさとしある、事情もきゝわけてくれ、さづけ一つの事情是一つ臺ともゆふ、存命中のこしおいたる、入込む一つ席とゆふ、存命一つの理も同じこと、おい〳〵のはなしきゝのがしの理で

はどふもならん、成程ときゝとつてくれにやならん、一日の日に身上不足なればとふく處、まだかいな〳〵とゆふ事情がありてはこべん、今日せつなみなれどあくる日はこぶ、ぢゆうよふぢざいの事情きゝわけにやならん、又今一時中々大變事情多くよる處、ぜん〳〵會議の處受とる處もあれば、それはなあと一時おさゑんならん事情もある、おもわく會議に理をあはせ一つの理を尋る、尋ねたらころつとかわる、皆たいそうなる事情をもたぬよふ、もたぬよふ、大層なる處それ〳〵いそがしい事務もあちらもこちらもほつておかにやならん、あと〳〵何年かゝろふがまあそこひ〳〵の事情、これはやくさとさにやならん、一日おくりに日をおくり、これはこうせにやならんどうせにやならんと、もう大そうな事はづいぶんの理におさめ、一年の

事情も上にたとゑてはなしよふ、今年に事情あつて又來年とゆふ、ことししもたら又來年ともゆふ、しきつた事をもたず、みな同じ事をするのや、是一つの理にきゝわけてくれるよふ。

明治二十五年十二月五日御教祖様御改葬當日の事情

第一　辨當二十五日に出す願

さあ〳〵尋る事情〳〵だん〳〵の處である一つをもつて大層であろ、尋る處速か許しおこう、なるだけの處は許しおこう。

第二　御酒を豊田山麓にて出す願

さあ〳〵尋る事情、處はどこでもよいなれど、ねがわくとゆふ事情さとそ、まあこゝではふつごう、そこ〳〵の心もあろ、内々ではと思うやろなれど、しんたん地場一つの理とゆふ、さあ〳〵一寸は取扱にくい、あちらへこちらへ人どうで混雜であろ、こうしたら勝手がよいとおもうやろなれど、しやんすればわからんやあろふまい。

第三　辨當置場南の屋敷にする事

さあ〳〵尋る處〳〵、是はもふ重々一時の理にゆるしおこう。

第四　本部員分支教會長乘馬の事

さあ〳〵尋る事情〳〵、みなそれ〳〵心をはこびつくす處はゆるす、なれどまあ一寸にはひかゑんならん處もある、多くの中とゆふ、群集の中とゆふ、馬のかずをゆるしおこう、さあ一二三、一二三ともゆふ、たれものる事はでけん、引馬同然此の理をわからんならば、尋るがよいあざやかわかるやろ。

第五　分支教會長及び女の者共車に乘る事

さあ〳〵よふきゝわけにやわからん、あと〳〵の處は車や馬の

とゆふは、すつきりはらう、よふき、わけ、長々の道を通りて今日の日、よふ〳〵の日けつこう一つの理、大切一つの事上といへばよふき、わけ、おくりはおくりだけの事をはこんでくれ、馬や車はすつきりいらん、みなそれ〳〵やれうれしい、やれたのしいとゆふ、なんぎよふくぎよふの道を通りた日をよふしやんしてくれるよふ、さあ〳〵かざりをつけ、引馬同樣とゆふ、それ一つは神乘馬、一つは齋主の馬、一つは副齋主の馬とゆふ事情におさめてくれ。

第六　墓所にて御勤めを致ましても構ひません

かなれど世界の事情も御座りますで玉串

だけに致ますもので御座りますか御願

さあ〳〵〳〵尋ねるやろ、尋ねば事情一時にさとしおこう、一日の日とゆふてある、順序一つ尋通りゆるしおこう、勤めとゆうこゝろにつとめさへあれば一時に受取る。

第七　刻限に掃除とゆふ事あるに付て

さあ〳〵もふ是一日の日をだん〳〵おいつめてある、日柄もまづない、又一つてんさいとゆふ事情もきゝわけにやなちん、そうじは萬事處にこゝろをおさめくれ、そふじ〳〵てんさい一つの理ははかられん、よふ〳〵の事におさめたる、大層は十分にうけとる、ならん處は十分受取、心いさんではこんでくれるよふ。

△明治二十五年十二月六日御教祖樣墓地繪圖の事に付御願（道友社にて發行する事）

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情は何にもせく事いらん、世界にて

せへては一つ道はんぜんしかたがない、はんぜん一つ道おさまりがたない、どんな事したとてなるものやない、是迄の道をみよ、どんな事みせるこんな事したら一つさまたげになるとゆふ、なれど元々一つ理がある、そのまなびさいすれば同じ事、どんな處からでゝくるともわからんと是までさとしたる、いばらぐろのあいたにさとしたる、そのとききたならみなこいしなるとさとしたる、これおもわにやならん、何程おもたて天よりあたへ一つとゆふ、どんな事したとてならん、しんじやとゆふ道々さとしてすればせかい人どんな事したとて用いる事はない、なる程さとしてそれにもちいらねば、しんじつはまらんのや、これよくきゝとりてくれるよふ。

△消防會葬事上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵〳〵、内々の處の事情とゆう、これはだん〳〵一つ〳〵理をあつめてでけた理、是は一つ理、又たに事上とゆふ〳〵、たに事上はしばらくたあてならんとゆふ事上、ことわりゆへんとゆふなれど、世上一つはなしくれ、世上はなしすればみなとくしんするである。

△明治二十五年十二月二十日教會獨立事件事上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、しゆん〳〵といへばのち〳〵ともゆふ、しゆん〳〵の道とゆふてこれまでながらくの間、長い日が ら又一つ事情にては第一事情是迄さとしたるは、千日の事上とさとしたるか、一寸千日もふ事上治まり、又一つ事情、又事情これよりはじめる、はじまるどふでも一時はなしどうり、よく〳〵事上、古き道よる〳〵刻限事上、だん〳〵事情さとした

る、日限とゆふもふ一だん一つ一時せかいだん〳〵の理をさとしたる事上、一時ふれながしだしたる處、みるよきくよ理がはじまる、しつかりあらため、一時道の事情何時なりとゆふてこれまで咄しどふり事上ある、又一つ一寸事情ある、たてあいの理世界一時の道事情ある、たてあいせかいはじまりかけたる道、じゆんじよの道事情、第一じゆんじよは世界まこと一つ天の理、これしやんこれさとしおく、又一時のち〳〵の道、今一時世界早くとゆふ、今順序たがいせかいとゆふ、あぶなきよふな道ある、又しやんもせにやならん、又でゝいくでゝくる事情ある、おもての道ひとりたあつてくる事情ある、でるたづねかけたら元ある、元がわかる、一時一つの道、爲なるならん事情、ほつておいてもでゝくる、たつてくる、一時にひらく一時になる、これさとしたる、さあ〳〵いそぐで、萬事何かはこびかけ、さあ〳〵ゆるしおこふ〳〵。

△會長樣上京致して宜敷御座りますか又代理にても出ましたもので御座りますか

さあ〳〵事情はこびかけるはもふおそいかはやいかでゝくる道、これみる一つかわいがる道もなけにやならん、これ一寸しばらく人間の中、ぎりやいの中ある、これはずせんどふなつてもならいでもぎりやいはたてにやならん、そふしたならはじまるで。

△會長樣押て御自分からやらしてもらいますと御願

さあ〳〵始まり、いくもでるも同じ事、尋にくる、それはこゝろ次第にまかせおく、心にうかぶさあ〳〵心すぐと〳〵。

△さよなら本日より出立する御願

さあ〳〵こゝろいさめばすぐとでるがよい、さあしんじつこゝろにいりこむで。

△本局管長様より會長へ呼狀付て御座りますが會長上京致者で御座りますか、前川氏代理で出しましたものので御座りますか御願

さあ〳〵どこから〳〵はなし、こちらから咄するも同じ一つ理であろ、これこゝろでどふゆふこと第一どちらで一寸きゝ、あちらで一寸きく、だん〳〵の事上、これ一寸あんじおきがある、いわずかたらず道ある、あんじおき道ある、事情に仍て一つ一時に事上さとすは一寸よいなれど、一時にてはあとへもどらんならん事情ある、ぎりあいの中、今一寸の處は代理で、一

寸おそいか早いかとゆふ事情、これ心に治めていかんならん。

△前川、橋本、平野、清水隨行上京の願

さあ〳〵まあ〳〵心でいかんならん、何にもあんじる事いらん、おそいか早いかとゆふり、こゝろせいしん以てだいじとゆふてある、一つたがいそのば一時むすんだる處、すぐと咄し事情ある、これだけはなしておく、だん〳〵何人よせてさき〳〵で、又々しやんある、あやしいおもいがけはあやしいせいしんみなこゝろに以ていけば理にいりこむで。

△共にやらして貰いますと御願

さあ〳〵ときがかまわん、時がある、さあ〳〵何でもこふでもいさんでかゝらにやならん。

△さよなら今日よりたゝして貰いますとの御願

さあ〳〵まあ〳〵一日の日もちて又一つ、それはせいしん定めるなら何時でも。

△御墓所の下へ番する處建物二間に三間の物建度御許被下か御願

さあ〳〵尋る處〳〵、そふゆふものはとこへなりとたてゝくれるがよい、それはゆるそ。

△山の入口へ關門建て度に付御許被下か御願

さあ〳〵尋る處〳〵、道に一つしまりとゆふ、尋る處道に一つしまり、尋る處又しまりあればそれ〳〵とゆふ、一時一寸世上とゆふ、さあぱり道にせきをして、人々とふさんようすればせかいとゆふ、すつぱりとあけはなしておくがよかろ。

△ぐるりへ垣致度願

さあ〳〵尋る處、尋ねかやす處、尋る處道を一つせき一つの理心もつて一つはいる事でけん、はいりしだいはこれ事情迄、さまたげはじいとあゝしておくがよい、又のち〳〵あつまりてくる、一時じいとしておくがよい。

△井戸一ヶ所堀度御願

さあ〳〵まあ尋る事情はこれはどうでも、あちらこちらほらんならん、又事上とゆふ、これはどこいなりと一つやない、二つと思へば三つ、これかゝるがよいこれ許しおこう。

△明治二十五年十二月二十日午後前日御本席様御身上御障の處御伺ひ

さあ〳〵尋るであろふ〳〵、一日を以てだん〳〵とゆふ〳〵、

何事もはかりがたない、一日とゆふ一寸事情なるばとゆふ、いそがしいとゆふ、こゝろさんらん、これまでどれだけの事ひきうけるとゆふ、これおめてくれ、又一時だん〳〵始める、はじめるやない、はじまるせかいはじまる、どんな事上一時ひきうけるとゆふは、大へん事上〳〵、なれど一時何もゆふ事ない、世界中いれもの中へちやんといれてしまりてある〳〵、いかなる理世界せまりきり、あちらもさんらん、こちらもさんらんあつまりたる、そこで一寸尋る、十分理であらためば十分はこんで十分とりしまらにやなろまい、あちらもこちらも、西風がふく東風がふく、どこへふくともわからん、何かの事これからである、よくきゝわけてくれるよふ。

△御本席様御用場普請繪圖面どふり御許被下ますか

御願

さあ〳〵尋る處〳〵、一時の道がだん〳〵おくれたる、皆日限から始めかけたら、日限是迄とりおくれたる、萬事是迄日限から始まりたる、尋たる處たちや一條、どれだけとゆふ、これだけとゆふ心にきらず、存命の間とゆふ、存命の間ならばたのしまし、一つすぎたる處、席にて指圖これ早くとりかゝりてくれるよふ。

△これにて御許下されますか御願

さあ〳〵づめん〳〵、づめん〳〵どふりとゆふ、尋ねかやす存命なら存命のこゝろ、心やしのふてこれでふそくとはゆゑん、これ迄よふさし入りてくれねばとんと理がわかりがたない、よくきゝわけてくれるよふ。

△明治二十五年十二月二十一日日々御授け御本席運び下さる處つかへて有ますから如何樣に運ばしてもらいまして宜敷御座りますか御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、事情はぜん以て一つさとしたる、なれど一日〳〵事上、せかい事上だん〳〵の事はこぶにはこべん事上、事情は一日一席三名一つの理定めたる、なれど遠くはる〴〵はこぶ處、一時うけとらにやならん、事上の處一席三名一日どふむならん處、とくべつ又一席なろまい〳〵、事情一日の一席あさに一席のところ二席、これはじよづめ、又尋る所よる〳〵事上日に四席〳〵、ゆるそ〳〵はしばらく〳〵、さあ〳〵又やぶん〳〵速かはこんでやりてくれ。

△明治二十五年十二月二十四日御本席御用場御普請

圖面改め八間にして御建申度御許被下か御願

さあ〳〵事情尋る處〳〵、さあ〳〵是迄になんとさしづさしづはだん〳〵事情、一時事情にてはおもいたち、一時しばらくとゆふ、一つ事上いくよいく間、事上尋る處どうしよ、こうしよいくいかん、こらさしづまで、これでかつてよい、一つ治まりて一つ事情、こゝろでたのしみうれしいという處、こらすつきりまかせおく、とりはからへ〳〵、理にうけとる、何よの事も理にうけとる、しつかりかきとりておくがよい。

△雪隱二ヶ所御願

さあ〳〵その所はまあ是でとゆふ、たのしみ理にまかせおく。

△風呂場の御願

さあ〳〵尋る處〳〵、それ〳〵みな事情についたる、これとゆ

ふ處、これも萬事まかせおくによつて、しつかりきゝとりておかんならんで。

△それでは材木買入の御願

さあ〳〵又一つ始めかけたら、始めかけたり以て一つさしづしておこう、何にもねんのいりたる事いらん、みなざあとしておくがよい、材木このんではならん、中に一つ理ある、大き心もつてなんでもとゆふ、ちいさいこゝろいずむ、ふしんちいさくてはみなよりくる處ある、これだけでけたる、皆まんぞくする、一名二人でなくたがいとゆふ、木材はとりあわせ、これがいかんどれがいかんと更にゆふのやない、まあだけ廣くしてざあとゝゆふ、もとかゝりつとめ場所三十年きりてある、一寸はながいもの、あとおもへばみじかい年限、さき思へばながいなれど、あとおもへばみじかい、いつ〳〵までもちいるのやない、それでざあつとさしづしておこう。

△墓地の垣北西東方致度に付前より押て御願

さあ〳〵事情尋る處、ぜん〳〵に事情さとしたる處、一つだん〳〵、それ〴〵心はこぶ、一時とゆふどふもあけはなしはさあしてきゝわけ、一時尋る處一寸人がこゝと一寸かゝりくる理すつきりもんうつてすつきりならんとゆふ、四方よりいりこむ處きゝわけ、すつきりならんとゆへばそれじまいのもの、これしつかりきゝわけ、なぜすつきりでけんよふきゝわけ、とりはなしはどこへもみなうつるとゆふ、これしつかり聞わけてくれ。

△押て後ろ垣だけ御許被下度願

さあ〳〵だん〳〵事情、尋ねかやす處、尋かやすには心理がさ

あさんなくして尋る處、これ事上きゝわけ、又一つさしづだん〳〵の理は、理をかへて理をゆるそ、あぶないこわいとゆふ、これおもう、それだけはうしろのりにまかせおく、あと〳〵皆いけ〳〵やで、かこてしもたらどふもならんりになろが、あと〳〵西北たにあぶなきなあとゆふだけの理にしておくがよい、これだけの事わからにやどうもならん。

△明治二十五年十二月二十七日御本席様昨日より御身上少々御障に付事情御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、身上事情ありて一日の日とゆふ、事情ありて一日の日とゆふ、だん〳〵事情がだん〳〵の事、おい〳〵一つはこびたる處、ぜん〳〵さとしたる、一時しばらくゆるしたる、いつ〳〵まで心もたず、みなこゝろもたず、又事情ころりとかへる、おふくの中からはる〴〵運ぶ、つくしての理によつてしばらくゆるしたる處、ころりとかへるどふゆふ事にかゑるなら、朝一席さとしたる、又おい〳〵事情もつて二席とくべつはこんだる、事情一つに定めてしまうとふした處、とくべつことわけ、ことはりゆふにゆはれん事情はこんだ理に又とくべつ一席二席、一席〳〵二席ゆるしたる處、日に三席とゆるそ、又席にきのすゝまんとゆふ、こゝろ一日やすむなら二日やすむやらわからん、たあてよぎなく事上は又そのまゝたづねてくれるよう、これだけさとそ。

△昨日御授け順序の處三名づゝ三席とのよふに思いますが押て御願

さあ〳〵事情以てさしづとゆふ、一寸さしづしてある、一席理

にてこれまではこびたる、だん〳〵日々の處からとくべつゆるしたる、まだいかん〳〵、これだん〳〵の處、是迄くだんいかん、これから日々とりあつかいくるものまんぞくは一日理にある、世上理にゆるしたる、それよりだん〳〵とくべつ〳〵、又とくべつゆるしたる、一日一席はしよがい、朝三席は三席とゆふ、これならんから一日も早くやとたのもしいとゆふ、これから一寸ゆるしたる、一日は一席理でゆるしたる、又一席〳〵二席これから三席と定めてしまう、りやないとり扱いにまかせおけばまだや〳〵とないよふに一日にかへる二日かへる處、もふかへりたかとゆふ、これなんぼの理になるともわからんなんら時三席ゆるしおこう、一席はりで定まり何日なるそれおふく中になんぼあるともわからん、ところでやれ〳〵早くとゆふ、そこで早くといへば、くるものもふか〳〵ゆふ事いらん、心得の爲咄し迄ゆるしておこう、よふきゝわけてくれるよふ。

△明治二十五年十二月二十八日飯降おさと身上御願

さあ〳〵尋る處〳〵、身上にてどふも何時となくして心得ん事情とゆふ、又候心おもへば又一つ、いくゑ〳〵、いく〳〵こゝろおもう事情とゆふであろ、まだ〳〵これからとゆふ、こゝろなくばなろふまい、よふ〳〵こゝろしばらくおさまりとゆふ、こゝろいさゝかでももたれてはならん、日々とゆふ長い道すがらたのしめばながくがたのしみ、こゝろせくよふな事さらにいらん、これ迄とふりきたるたのしみはかゝりとゆふ〳〵、身上ふそくなるとおもわず、よふ〳〵心いさましてくれるよふ。

終（明治三十五年）

明治三十六年

おさしづ

（明治二十六年）

△明治二十六年一月十三日夜二時四十五分刻限の御咄

さあ〳〵〳〵〳〵、一つ話し、一寸かゝりかけた、どういふ事もうこれだん〳〵ひろくの處、一寸しばらくの處、あちらもせまいこちらもせまい、取よせ、せまい〳〵處からやう〳〵取ひろめた處、かへて事情一つおほくの中、やれ〳〵といふ、やう〳〵の日一寸うつりた、日々の處、おほくの中のしあん、今までうち〳〵思案、これからは世界の思案とたてかへる、一戸一つの思案はかたいやうなものなれどよはいもの、一般世界の理から治めたら、どんな事でも治まるともわからん、まあ一年で

できようか、三年でできようか、一だんしあけて、又一つしあげて二だんといふ、わからんから皆道をうしなうてしまふ、これさへ〳〵とうまい事ばかり思ふからどうもならん、大きいものは早くほし、道すぢとられてしもた、年限知らんからどうもならん、此のざんねんさなんともしれん、世界多くの中、だん〳〵入こんで一寸初めかけた、内々に一つ事情、世界事情、ひろい心さへあればどんな道もついてくる、はなしをくだいてもつてゆく、ちいさいからどんなになるともしれたものはない、見えてさきからしらしたる、なんでもないと思ふからそれまでのもの、一重二重つんだ、これまでといふものはぞんめいの間はたより、一人又一つ事情を是一年の間にしもふた、それより一時事情又一人、それよりかんがへばどんな事でもはい〳〵、

此理けつこふでありますこの道わからんからくもる、一寸くもれば何にもわからん、はじめられん、はれん心にもろ〳〵がどうもならん、これ一つなんでもはらさにやならん、世界一ぺんにはらさうと思へど、あちらから雲が出る、こちらから雲が出る、今迄の處存命の間、一々一つの事情まかせおいたる、筆さきにもでてある、十二下りの理にもでてある、十二下り出てゐる、この事情からはい〳〵、この事情から聞き分け、たゞ一どの道じやあろまい、とほりたらわかる三年これまでたのしんだる世界あきらかといふであろ、ゑんりよきがねはいらんといふたる、たのみおいたる一つの理、十二下り一つのからだよりをさめきたる處、だれがたよりであるか、一人の目あてに入り込んだる、中に大せつなにが大切、いかな處もしあげた、入こ

んだるからだといふは、この道はじめかけたる、くさばへの中から始めかけ、どんな事もでてある、もうこれ心さへくもりがないと思ふ、くもりさへなくば何もこはきおそろしいはない、もう一段一寸かゝりかける、一どにもしあげる、一時の理、一時は一時一つさあ、一代も一年一年も一代、これ事情にてさとつてくれ、是までよりだん〳〵しやんしてみよう、うそはない、うそは一つもいふてない、これ事情にて、たがひ〳〵の心ををさめてくれるよう。

△明治二十六年一月十五日午後十時十分前の刻限は

本席様御用場の事を考へ候へ共何分不行屆の者にて確とさとりかね候に付如何に候や押して願

さあ〳〵〳〵、一日かといへば二日かといふ、さあ〳〵どういふ事で一日何かさつぱり氣がいづんでどうもならん、なぜ氣をいづます〳〵、なにもいづみかけたらどこまでいづむやらわからん、これまで一寸はなしもしかける、事情もしかける、いづんで〳〵いづみきつてある、はやくとりかへ、いづみきつてしまへば日々が一日もどうもなろまい、とりかへ〳〵、何でもかでも勇むやうにとりかへねばならん、一つの理がをさまらぬからいづむ、ぜんもつてさとしたる、一つ事情初めかけたら又いさむ、たいそふな事せいといふたのでもあろまい、さあ〳〵はやくとりかへ〳〵、とりかへてのはなし、どうでもかうでもいづましたぶにやならん、人間心一つの思案からいづむ、なんでもかでもとりかへ、まだ〳〵いづましてはならんで、まだ〳〵つれてとほらにやならんで、一人をめどとしてつれて通

らにやならん、いづます心まちがふで、初めた一日の日をさめにやならんから、どうなりかうなりおくりきた、いづましたら世界がつまる、こんやはいづむだけのはなしをしておく、いづむいづまさんは、取次一つの心の理にある。

△押して本席御用場普請の圖面は此中御ひき下され候ものにて建築御許し下さるや

さあ〳〵口があいたらわかつてくる、いかなる事もきく、心にあたればわかる、何間何尺ときりをきつた事情は受とれん、きりをきつた仕事はかゝりかけたとてでけん、一時のまんぞくをあたへんから、心がいづむ、こんどいづんだらどうもならんで、まだ〳〵つれて通らにやならん、なんぼでもしやんつかん、つかんはずやぎつしりおさへてあるからつかん。

△押して右普請につき相談のため東京へ至り候てよろしきや、又は御歸りまで相待つてよろしきや

さあ〳〵、尋ねる處かやして尋ねる、何もどうせいでもよい、ほどなくの事情にてみなもどる、もどりてきたなら、どんな事もさておいて、はなしにかゝらにやならんで、それをほつておいたら、たの事もどんな事も受取れん、それまでは猶豫ひのべといふやうなものやで。

△しばらくして

あすからせきをはじめるで、はやくよりくりだし、何名〳〵とちやんとようをしておかにやならん、しつかりはなしをきいておかにやならんで。

△明治二十六年一月十九日（舊十二月二日）前裁松
本太平地所並に水車納屋共買入御願

さあ〳〵 尋る事情〳〵、さあまあ一寸ひろくといふて、ぜん〳〵何度さとしてある、事情生涯の事情はじめ、はじまりどこまで切ない、はなしかけたるせくことといらん〳〵、なれど一つはどうでもといふ事情ある、それ〳〵おもはく通り事情ある、尋ぬる處そこへ〳〵まかせおくによつて、心おきなうかゝりてくれるがよい、さあ〳〵ひろくがのぞんでゐるで。

△明治二十六年一月二十一日御本席聲かすむに付願

さあ〳〵〳〵、一寸尋ねる處、尋にやなろまい、どういふ事であろ〳〵、まあ一日つとめる又つとめる、だん〳〵つとめたる處、理に一つがかさなるであらう、どうでもかなさりたる理は、いくへ道をつけにやならん、よう事情聞分けにやならんで、日々つとめる處、あれはあれだけのやくや、さもなくば理がそわん、これだけみわけてやらにやならん、みわけにやなろまい、日々せき〳〵といふ、せきをはこんで日々の日といふは、だん〳〵の理をもつてつんだる處、聲が出にくい、早くもつて尋ねた理はよく尋ねた理である、つとめられるとつとめられんと、これきゝわけ、又かさなりたる處、だん〳〵いひきかしたる處、はやく取きまりて、事情重々たんのふあたへ、たれのものとおもへば、そも〳〵日々だいといへば、一日の日もほつておくわけにはゆこうまい、これきゝわけてさだめてくれ、なんでもないと思へば、だん〳〵の理をつんだる、よく聞きわけ、身の内一寸さわる、さしづといふ、追のばしといふ、さあ

ばつたりといへばどうなる、日々むになる、一つの心をいさんでくれ、いさめにやならん、いさめさゝにやならん、一日はよい、ほつておいては日々はこぶ理になろまい、よう聞きわけ、みな〳〵の心かうしたならあかるくなる、くらくなるといふは、一つの理にわかるやらう。

△明治二十六年一月二十一日會長様外四名東京より御歸り下され候に付事情御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、ぜん〳〵もつて事情一つでこしたる處、入込んで事情とさとしたる、一寸かゝりといふ、かゝりといふはわかりがたない、何たる事さしづ、一つはどういふものと、だん〳〵おくりたる日がら、のち〳〵一つ事情がわかる、二つわかる、三の理重々理をさまる、一時の理であろまい、とほくさとしたる、いづれ日がある、どうでもかうでも通さにやならん、道の理によつて大いなる處から一つどう、一つの道のかゝりといふはあぶなきもの、一寸のかゝりといふ、あちらも一寸、こちらも一寸のかゝり、ふみかぶる處あやしい處、一寸入込んで一代理といふ、どうでも代理でいかん、おそいや早いか出にやならん、おぼつてある處、まんぞくしる知らんの理にをさめてある、一寸の理をさめておいて、それからはじめるはじまる、一寸にはいくやない、一寸にいくやうでは一寸の道といふ、だん〳〵海もこし、山もこし、ろくぢの道をつけるは一寸にはいかん、これでもなあ、つくしたなあ、つくした處、重々おもひついたるはつけにやならん、是迄だん〳〵の事情つくした理はどうなるとおもふ處から、一日の日なんでもないも

の、やうおもふて一つの理皆つれて通るが天の理、つれて通つて心の理が世界といふ、どれだけいひふくめた處が、やゝこしいと思へば、入込んではたらけばいかなる道もつけにやならん、ようこそ事情理をはこんでくれた、身にさわりもなく、一日の日にはさしづ一つの理はどういふものと思ふたやろ、これよりをさめかけたら又をさまる、をさめにやなろまい、皆々心をそろへて十分たのしんで事情といふ、もうあやうき道はないで。

△明治二十六年一月二十九日用場所普請願

さあ〳〵尋ねるやろ〳〵、時々もつて尋ねりや、ばんじ事情しつかりきゝとれ、いくへ道これをだいといふ、だいといへば一つにはせにやなろまい、何間何尺の事情は、すつきり受とれんで、取消してしまふぞ、さあ〳〵あらためかへ〳〵。

△押して願

きのやしなひを知らんか、これまでつたはる道をみて、きのやしなう處をしらんか、いかなる處もしらんか。

△押して願

さあ心にうかぶまでおつておけ、入込んだら、どんな事いふやしれんで。

△押して願

さあ〳〵、事情押して尋ねる、なぜやろといふであろ、心にははんぜんわかろまい、わからんから日がのびる、月がのびる、今の今といふ建家一條にてはかりやだちといふ、今日にたてゝ明日取りはらうやらわからん、ぜん〳〵理に一つにさとしてあ

る、たいそうと思へば大さうなる、さあどういふ事情でるやしれん、いさめばいさむ、心の理にたのしみといふ、いかなる處も入込むといふ、守護といふ。

△押して願

まだ〳〵早い、これでこそうれしいなあと、とくしんはつさんの事情なけりやいかん。

△明治二十六年二月四日本席様用場所普請の願

さあ〳〵尋る處〳〵、だん〳〵の事情、尋ねかやす處、いかなるさとし、いつ〳〵もおなじさとしと心に思ふ、今日のいふ理さとす、あんじないいかなるも事情とりてくれ、事情ぜん〳〵からつたへ、なん間いく間いはんといふ、又々一時の處どう、なにがなにやら、はじめたる道の理によつてとりさばき、事情

おなじ事なら、同じ理これきゝわけ通るなら一時ゆるそ、わからんからわからん理だて、そこでおさめにくい、これだけしつかり聞分けてくれるやう。

△明日よりかゝらしてもらひます願

さあ〳〵、一度もだんじ二度もだんじこれといふ、一時初めかけたら、又はじまる、たがひ〳〵の心あはせてくれ、どうがよかろこうがよかろ、それはだんじの理によつてといへど、ふあんといふあんしんといふは、とりかゝれといふ處はだんじのあんしんにたづねでるがよい、これ一時さとすによつて。上、けふばんにたづねでるがよい、これ一時さとすによつて。

△明治二十六年二月四日夜御本席様用場御普請願

さあ〳〵だん〳〵、だん〳〵おくれる處、ならん中にだん〳〵おくれる、いろ〳〵さしづにしてある、どういふ事してある、

夜ぶか〳〵一つさとしたる、一時尋る重々の理、又一つさとしおくどういふ事であらうと、一つふしぎにおもふ、又人間の心あらうか、人間の心さら〳〵ないとさとしておこう、又一つだんじ心にわからん理あれば、十分尋ねかやすがよい、一つは御用向といふ、神の御用向たちやといふは、一つさしいりて一寸これだけの事を、もうどんなたちやふそくいはん、定めた理でこれからさき〳〵、長くすみかといふ、御用所とおもふ、御用所とさとしてない、たのしみ見にやならん、これまでなんぎの中、不自由の中の道を通り、よは〳〵通り、よう聞きわけ、おほくの中よりいりこみ塲所地塲へひきうけ、一つの理をきゝわけ、一つもらひ受けたる處を、さしいりてぞんめい中、なんぎ〳〵の道を通し、事情一寸をさめかけ、よぎなき事情にてみを

かはして、これからぜん〳〵みわけば、あざやか小人といふ、だん〳〵とさとし、やう〳〵小人にのつて守護、一寸心あらためる、それ〳〵一つ〳〵理があれば道といふ、よう聞き分け、人間の心さら〳〵もつてさら〳〵いはん、なんべん尋ねても、幾間何間はあろまい、これだけだんじ一つうけとらにやならん理であろ、どんなふしんするといへど、何間何尺をさめる、うかがひからさしづといふ、すこしはかはる、どうしてくれい、かうしてくれいとさとした事はない、心の理だん〳〵さとする、一時はじまりたる理といふ、よう聞きわけ、中々の中にはもうあれなら十分といふなれど、十分と思ふ理で一寸おもはく、一寸ゆつくりした、不自由なんぎの中通りた理に、これこそまんぞくあたへてくれとさとした處、まだわからん、十分と

いふ處、一寸受取れん、一寸大もうと思ふ、大もうとおもはずしてまかせてくれ、たれにまかするなら、これまでどんな事通りたる理にあたへて、まんぞくさゝにやならん、上だんの間、又かはりた事はいらん、人が見ればぶさいく、なんぞいなあといふ、これみなだんじをして、一時の道またの道である、人の道と心の道とことなるによつてよう聞き分け、一時の處あらためるなら、よる〳〵さとさにやならん、ざわ〳〵した處ではたにうつる、たにうつればうつとしてならん、そこで夜深〳〵、事情さとしておかんならん、もうあす日からかゝりてくれ、いかにもこれでまんぞく、きりてのふしんは受取れん、かゝらりやせんで。

さあ〳〵、もういろ〳〵はなしではわかろうまい、もう十分わけてはなししておく、それよりもちいりて席々といふ、席のはいるとをさまると事情ちがふ、はいるとをさまると、中にうつると云ふはかはる、人間心ではいはん、席といふてある、あら〳〵と思ふ、ほふといふ、たてやのぞみ早く、そこで思はく通り、又たのしみといふは、心にまかせにやならん、心にこれだけの事でけるか、これでけつこふ、まんぞくといふは、一時うけとる存命の中やで、一年の事情みて事情といふ、これからきゝわけ、すみかけたら、それ〳〵の上から何時なりとせつかくの事情あだとなる、わかるわからにや、何時なりと尋ねかやせ。

△押して御本席御思召通りにさとして貰ひまして宜敷御座りますか願

さあ〳〵、やう〳〵の道、やう〳〵の道、なるほどどれだけといへど、下にもうけん、手にもつてたのしみ、十分あたへ、十分あたへなくばむになつてしまふ、これだけすれば十分と、これ思はずすぐ受取る、これからきゝわけ、まだ〳〵道ある、道あつても手をくんで定めてくれ、又一つをめをそれはするやないい、みな手をくんでつれて通さう、どんな事でもおめおそれする事はいらんで。

△明治二十六年二月五日夜御本席様御用場普請の處

前晩の御指圖より運かた申上普通今日よりかゝら

して貰ひます願

さあ〳〵、だん〳〵の事情、おひ〳〵やう〳〵の日追ひせまる處、さしづといふ、さしづある、みなさしづながめ、それよりだん〳〵かゝり、とりまちがひの處もあろ、とりまちがひの處ありてけふまでといふ、うけとれるかうけとれんか、日のべたる處うけとれん、そんならけふからといふ、そんな道やあろまい、心にとりては、とうぜんのりといへど、心にきゝわけ、ワア……。

△押して申上

さあ〳〵、もう是までの事、すつきりとりけしてしまへ〳〵、これまで何度さとしたる、たいせつもどういふたいせつもある、一つははこびかたもいろ〳〵ある、そこでせつかくの圖面いらんで、もやしてしまへ、すてゝしまへ、これ〳〵ようきゝわけにやわからん、どんな中から、どんな事まだ〳〵といふ、これさしいりてさとりてくれ、一寸おくれたる、一つしらし又

圖面しかへ、十のものやらうといふのに七つのものわたして、心はれるかはれんか、これよう聞き分け、もうすつきりいらん〳〵〳〵、あらため〳〵、改めたらおもはく〳〵、あたへにやならん〳〵。

△明治二十六年二月五日午後一時三十分頃本席様御用場普請のことに付、是迄の處諸員一同の屆かぬ義御詫申し上げて御許の願

さあ〳〵、もうどうもならんから、みなせつかくのいくばん〳〵、だん〳〵どうがよかろ、かうがよかろ、そらしんじつの事情、あちらこちらへどうなりの事情といふ、どんならん處、すつきりと、ぜん〳〵の事は取けしてしまふ〳〵、なれどまだ事情あろ、すつきり取消してしまへば、それきりのもの、これからあらためかへばどんな事でもうけとるが、よう聞きわけ、どんなことも受取るが受取ればつたはにやならん、どんなしれんものだんじ、どんなものうけとるといふたぶにやわからん、ふしんはあはてる事いらん、かうしてゐる、一寸治めてたゞ〳〵中にどういふ事情さとするなら、云ひかけてから、半年近くとりおくれてある、かゝらん事情、取おくれるはどういふ事といふ、これなんしにきてる、又たにんどうしてもけつこふといふて、これまでつとて來たる、道つたふにこれまでわからんなりの理はすぐにつたふまい、むりな事いふとおもふやろ、むりと思ふたら無理になる、もと〳〵から持ち入りてとりたてゝくれにやならん、もちてるものはなしてなりとはこんでくれにやならん、白きものは白きに見る、赤きもの赤きにみる、黒き

もの黒きにみるはみな世界の事情、ようき〻わけにやどんならん、なさけないならんもうならん、もうやめやうかしらん、おかうかしらん、その事情から又ふるき事情ある、たちやあちらこちらみて、くさりたちや、くさばえの中のたちやといふ、それからき〻わけにやわからせん、よう聞き分け、一戸どうであろ、一戸一人かぎる處、ながらくの處、やれ〳〵といふ、又やれ〳〵といふ理をなけにやならん、これからき〻わけ、すつきりまかせおく、ふしん一條まかせる、ふしんだけの事情まかせる、まかせるとすれば、ふしん一條これで十分なるほどまんぞくであろと、これまで人の中かくれしのんでつとふたる事情、これき〻わけ、みな日々といふ、又うれしいかさなる中に、どやしらん、けつこふの中に、おもひすぎる事情、おもひすぎる事情わからうまい、又一つさとしおかにやなろまい、けふの一つき〻わけ、まあ普請一條はまかせる、まかせたら受けとる、どんな理も受けとる、これから又はなし、さしづ事情はどこからまかせた、まかせたら、めん〳〵事情からあらためて、心せいてまかせにやならん、どんな事もある、はやくき〻とれ〳〵。

△普請の處今日より押して御願

さあ〳〵まあか〻るふしん、一日二日半年の理をもつて、はやいおそいの理はない、心はつさんさして、これでどういふ事もしてくれるがまんぞく〳〵、あんしんあんらくあたへて、しばらくはたらかにやならん〳〵、いづむ心はなあ〳〵〳〵ウア……。

△明治二十六年二月六日朝事情願

さあ〳〵、よう事情〳〵、是れまでの事情に、さあ〳〵わからん〳〵、どんならん、わからんからかういふ日が出て來る、幾日たてどもすくんでゐる、けふはおきられようか、あすはおきられようか、かほがなつかしなつたらどうするぞ、ワハ……さあ〳〵みんな勝手ばかりいふて、ほつておつてはどうもならん、ほつておくからかうなる、まだ〳〵何んでもかでもはたらかさにやならん、是迄の處だん〳〵日を送り、どんならん事情から日のべもし、どうなりかうなり是までの處、ワア……これまでだん〳〵さしづ〳〵で日々の處、あぶない處もこはい處もしらし、かうなる道もしらしさしづ順序、あぶなき道を通りたか、よう思案すればわかるやろ、たゞ一言のさしづやはらかなもの、さしづにまちがひあろまい、心しんじつの理をみわけるなら、まちごうた理はあろまい、これだけきゝわけておけ。

△明治二十六年二月六日前事情につき會長様初め役員一同御本席の御機嫌伺ひに出でし際の刻限

さあ〳〵はやいと思へばはやうなる、おそいと思へばおそくなる、むつかしいといへばむつかしいやうなもの、なれどよう思案すればむつかしいやない、思ふやうになる事がひまいるといふ、よう聞き分け、みな心運ぶならならんことはない、始めかけがぜひなく〳〵身をかくれた、なれど日々入り込んでゐる、入込んでゐるは承知のことでもあろ、入りこんで初めたることに、まちがふた事はない、人間の心なら二つに一つはまちがふことはあろ、入りこんでゐるならこそまちごふたことはない、

早くしあげてくれ、おもふやうにならん、まちがひの事情もあろ、萬事立て合ふてある、立て合ふたこともおひ〳〵をさめて、また入り込んでゐる處は、どうでもかうでも、だうしたとてかうしたとてはなしかけたらせにやならん、さしあげてしまふといふた、始めの理を聞き分け、一つの道一つの理一つの心、是れ三つ一つかけてもならん、どうなつても案じることといらん、日々盛大の道を見れば、みなたのしみやろ、手をおいて思案折角の道、三里もどればこんど三里ゆけば、十年もかゝること、物といふのは一時になれば心よいもの、無理〳〵の理をあつめてすれば、いろ〳〵の理が出る、いさむ〳〵と口で勇んだ處が、日々どうよかうよ、これがむつかしい、これをよう聞きわけてくれ、元々より始めかけたるはなし、なるならんみる

見られんもあらうまい、建家とほい處みるやない、あちらへゆけば草だらけ、是からふみこみ、だん〳〵始めかけた道〳〵、こはい〳〵たよりさへせにやよいと、にけでしまひ何事も誠にするものなかつた、一人のあるじといふは、神のいふこと用いらず、今年もあきなひや、そうばや、いろ〳〵みなくしてしまふた、よう聞き分け、何もない處より、それ〳〵だん〳〵道をつけてきた、道をつけてきたは神のりやくともいふ、神のはたらきともいふ、それよりだん〳〵のぼり〳〵、あちらへ入りこみ、こちらへおしあひ、わからん〳〵、だん〳〵おくりてきた、もう一だんといふ處、どうもならん、よぎなくかくれた、二年あとのはなしみな前後は知つてあろ、つゞまる處はさつぱりの處より始めかけ、何もしらんものよせて、今の處はかたい

道具にもなりてある、どんなものでもしこめば道具になる、しこみやうがわるければ、中ほどからでもきづになる、年限〳〵是まで存命の間たちきたるといふ、一里四方やどやもせにやならんといふ、一里四方もまだせまいなあともいふてある、しるしだしこれは何處の國やなあ、云ふておいた、いつの事なあとおもてゐたやろ、これはせんの老母さんのいはれた事や、今は席といふ、席のいふ事いりこんでのはなし、またがりはあろまい、みなをさまるあつまる、どこへ出るにもあんぜなく、心おきなうで、ゆけと、いふて間違へば不足云ふがよい、あぶないやうなものなれど、心までにみなをさめさす、何もない草ばえの中から始まつた事や、事が大きなれば大き心さへもてば、なんでも大きなる、なほしてある道具もあり、つかはにやならん

道具もある、だん〳〵道をしたふて出てくる、又あたへをわたす、この一人より話を聞いて、理を世界どんな事出來てくるやらわからん、あひ印をしてくんであるごとくやで、最初裏は鍛冶やおもて大工といふ、これは何の事やら、ふしぎなことやといふ、知らず〳〵通り來たもの、それ〳〵心さへ治まればあたへといふ、日々あたへさへあればたのしみ、一寸にはむつかしいやうなもの、たれがするともなく、目にも見えず言葉一つの理、あだに一つの理はない、よう聞きわけてくれ。

△暫くして

さあ〳〵はなし日々の處、いそがしいてどうもならん、いそがしいも事情、事情に一つのをさめ、なんぼ事情はこんでも、あちら二十人こちら三十人、五十人、只一つの事情、だん〳〵

おくれる〳〵、かうおくればいつの事やらしれん、どうもならん、よぎなき事を思ひ出し、だん〳〵の理も一つわすれ、二つわすれ、折角遠く處運ぶ、一日おくれば二十日、一年おくれる、日々はこぶ一席三名と始めかけ、それではかたづかんといふ、まあ〳〵つくねておくやうなもの、つくねてあつてはかはかしてあるやうなもの、上はかはかずして色かはる、又一席まだどんならん、又特別一つの事情をはこばにやならんから、なんでもとおもてかたづけた、なれどあちらへ何人、こちらへ何百人、まだ〳〵の道、一名の席がやすんでゐた處では、やう〳〵はこべども、まだ〳〵いかん、只一つの席、あす日から三名、さあ三名といへばつまらんとおもふやろ、三名は定席それから特別、まだとくべつでいかん日は、席にいへば何名ともいはんから、すんであるだけはこんでしまふ、あす日からはこばすで。

△明治二十六年二月八日御本席様御普請間取九間と
しての願

さあ〳〵、尋る事情〳〵、建て家一條、理を尋る處、さあ〳〵事情〳〵、よく事情さとし、又々理さとし理あろ、一時あらためて一つの事情、あらためて一つ、みな〳〵事情、一つをさまればみなをさまり又一つさとす、一日といふ二日といふはかりがたない、ならん事情一日の事情、いく度事情、なんど心をさまれば、日々といふようきゝわけ、たのもしいや〳〵と心勇めばいさむ、一たいから又事情一日なりといそぐはみな事情かゝるなら、一時心それ〳〵、又々はこべば萬事をさまる、尋る事

情、まづ〳〵をさまれば一つをさまり、又をさまりかゝる、事情は何時でもゆるそ、何時でもかゝるがよい。

△明治二十六年二月八日（舊十二月二十二日）用場所建築地の東に隣接せる稲田源次郎三畝餘歩の田地を買入の願

さあ〳〵尋ねる處〳〵、尋る一つの事情さとしておかにやならん、ひろく〳〵といふ、何んでもひろくといふ、いそいでどうしようはこびにくい、おい〳〵といふ、又はじまる、又あちらこちらおひ〳〵年々といふ、尋ねでる地所それ〳〵事情である、それはだんじ一つの理にまかせおこう。

△明治二十六年二月二十日分教會支教會出張所布教所事務取扱等會議事情相定め右事情申上て願

さあ〳〵、一時とりしまりた處、一つ理尋る處、事情は隨分それ〳〵の理、中に一つ事情理を一時事情、それ〳〵だんじたる處、一つたいせつみたる處、一つずいぶんそれ〳〵だんじとさとしたる、談示一つ理から尋る事情からならば事情に受取て、それ〳〵理、さあ〳〵しばらく事情治めかけてくれるがよい。

△明治二十六年二月二十一日來る舊二月一日二日御本席六十一歳御祝の事情御願

さあ〳〵尋ねる處、さあ〳〵まあ〳〵やう〳〵の日をまつて、人間事情とんとたのしみがあつて、たのしみがわからなんだ、今の事情ひろく世界といふ、萬事事情どんな事もならんとはいはん、事情もつてしるし迄でもまんぞく、しるし迄のまんぞく生涯のまんぞくといふ、かるく〳〵ほんの一寸といふ事情には

こんでくれ、まだ〳〵の道であるから、一時の處どうといふ、それはだん〳〵の理になる、是からさきはまだ〳〵ながいからしるしだけといふ、事情はゆるしおこふ。

△御祝につき御ごくの事

さあ〳〵尋る處〳〵、事情一つは理とおもふやろ、何もどうせいでもよい、かるうして一人もまんぞく、これ一つ理をまかせる。

△明治二十六年二月二十四日（舊正月八日）分支教會長會議の上將來は綿服に改め政府製艦費に一萬圓献金願

さあ〳〵だん〳〵事情もつて尋ねる、いかなるも尋ねるであろ、又一つにはどういふ事も萬事にち〳〵といふ、一つ〳〵の事情といふは、これまできいた處よりはじまりた、かんなんくろふさとする年限事情さとせば一つの理はをさまる、事情といふであろ、まあ〳〵思ふ〳〵だけはとほれやうまい、なれど心だけはうけとる、そのばばうけとるなれど、のち〳〵皆こゝろといふ理がある、いつ〳〵生涯理にさだめるなら、まだ〳〵どんな道あるともをさまるともわからん、萬事のところきいてかんなんの道をさとするなら、かんなんの道を通らねばさとしようまい、これ一つの事情しつかりきゝわけ、一時尋るおもはくの所、一日の日にうけとる、これ一つよく聞分けてくれるやう。

△押して願（義捐金の願）

さあ〳〵それはどうともいはん、云ふた所が理があつまらねば

あだとなる、いふまでや心に一つ年限もつてといふ、そのばの心であつて、のち〳〵といふ、さしづは出來ん、めん〳〵心の理にある、これ一つよくきゝわけてくれ。

△明治二十六年二月二十五日網島教會これまで月次祭二十五日の處本部月次祭に差支へ候故二十二日に願替致度御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情は一度にして一つ、さあ〳〵ゆるしおいたる一日の日なれど、事情によつてかうといふ餘儀なく事情である、さあ〳〵ゆるしかへやう〳〵、ゆるしおかう〳〵。

△明治二十六年三月四日（舊正月十六日）村田長平豊田御墓地埋葬の願

さあ〳〵たづねる事情〳〵、事情はわからなんだであらう、だん〳〵ぜん〳〵何度さとしついてある、今日の日かなしむ事なし、くやむ事なし、それ〴〵つたへてくれ、しらず〳〵どういふ事もあらうまい、何度〳〵さとしてある、第一の理さとする、あと〳〵重々の理をさまつてゆく、順序の理はこびつくしてこゝがよいといふなら、はこんでやつてくれるがよい。

△明治二十六年三月九日飯降さと左の乳の下いたみねがへりも自由ならざるに付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、身上に事情こゝろえん、どういふ事身上からしらしおこう、一日二日をもつてばんじ取扱とりもつてくれにやならん、年限まつて事情、内々ではをさまらん、年限おほきいとれば大きいもの、たゞ一時の處内々から一つの事情

もなけにやならん、内々だんじよくきゝとれ、まあ一時の處はかりがたない、どうかうとさだめられん、ぜん〳〵さとした る、一名一人の事情ですればをさまらん、萬事だんじあひ、席内々一けん一人の理ではをさまらん、かうせにやならんか咄し合、たいもうな事はいらん、一寸の事にして顔みておうといふ事情にをさめ、咄したらたいへん、事情にてをさまらん、この事情をさとしおこふ。

△明治二十六年三月十一日飯降さと前の通り身上再び御願

さあ〳〵尋る處〳〵、身上ぜん〳〵から一つ〳〵さとしたる、又一日といふ身上ふそくどういふ事と思ふ、これまで又はなし身上の處はすみやかといふ、是迄だん〳〵さとしたる、一日の日もこれではとおもふ、何も一時の處どうといふやない、一日の日もまだ日があろ、いさんでくれにやならん、その日になりてどうなろと思ふやろ、なれどふんばらにやならん、たのしみ一つの理をはやくつたへてくれにやならん。

△明治二十六年三月十二日飯降さと身上すみやかならぬに付御願

さあ〳〵だん〳〵尋る處〳〵、いくへにもさとしてある、たゞ事情一時、事情たのもしい〳〵、あんしんさとしたる、又それ〳〵心あろ、又一時どうならうといふこゝろ、一寸事情さとしおこふ、事情よほどの事情におよんだる、なれどふんばらにやなろまい、一つはたよりない話しと思ふ、一つ世界といふふそくなるところ、一日の日をみて事情はこび、あんしんなれど一

寸ふんばらにやなろまい、又年限といふは第一たのもしい事情、世界事情ふそくなる理わかろまい、なんであらうといふ、一時あんじることといらんで、あんじてはならん、一日の理を以て又世上といふ理もあろ、心に持て事情をさめにやなろまい、これだけさとしておくによつて。

△明治二十六年三月十五日朝飯降さと身上願

さあ〳〵だん〳〵たづねる處〳〵、長らへての事情、道々の處にて是まで重々の日にをさまり、おもはく十分なる處、十分になる處までよういなる處、その日までのところ、日々通り來たるところ、又一日二日もう三日といふ、身上どうも心得んと思ふやろ、萬事それ〳〵に心の理をもつて事情、かう又かうさしづしたらかう、やう〳〵事情だん〳〵さとしたる、もう十分の

處あちらこちら心をかねてはこんでくれる處は受取る、身上どういふ、なんでもかでも及んできたる處、よう思ふてくれ、ほかへいさゝかでもたんのふといふ事情、それに身上心得ん、萬事席にしらしてあるからあんじる事いらん、一日二日三日たてばかたづくから、事情〳〵といへばあんじる、是迄はこんでくれた禮までのべておく、一つ心はつさんやう〳〵の處、年限六十歳六十一歳やう〳〵の日までおよんできたる、どういふものと思ふ、身上心得んちづ〳〵の處しらせたるところ、しばらく事情みないさんでくれるがよい、さき〳〵勇んでくれ、席が勇んでいりやみないさんでくれ、今一時すつきりあんしんしてゐるで、どんな事になるも世上も地場もおなじ、それさへかくごすれば何んでもあんじるやない、これまでようつれて通りきた

る、席はあんしんしてゐるで。

△押して

さあ〳〵、もうこれまで萬事身のさわりに付さとしてある、是迄心をはこんで身上せまりてある處、どうでも一寸ふんばらにやならん、そこで席にしらしたるといふ、何もあんぜる事いらんといふだけのさとしをしておいてくれるやう。

△明治二十六年三月十五日午後飯降さと身上本部長様より御願

さあ〳〵だん〳〵の事情、又だん〳〵の事情もう是一時事情、さあ一つ第一といふて尋出るところ、身上不足なりたる處、いかなる處だん〳〵これまでたのしみたのしんだる處、身上事情せまりたる、事情大へんなる事情なれど、一寸なあ〳〵だん

〳〵さしづおよんだる、一寸ふんばる〳〵、もうどうであろ、さあどうやなあ中におなじ理、ばんじたのしみ、これもたのしみあれもたのしみ、自由用といふ、これ一つしつかりきいてくれ、一時なんどきともわからんなれど、一寸ふんばる、いかなるもふんばる、みなこれまできいてとほりてゐるであろ、しようと思ふてなるものやない、しようまいと思ふてもなつてくる、これどうしようと思ふてもならん事情きゝわけ、むつかしいさしづなれど一寸ふんばる、一寸ふんばるのやで。

△明治二十六年三月十八日飯降さと身上の處未だすみやかならぬにより今一度會長様の手順をはこび神様に御願申度旨御本席へ清水、桝井二名より御願下さる節御本席火鉢にもたれてのおさとし

もうあんしん〳〵、ねがふまでや。

△押してよしるより今一度ふんばつて下されたき旨

御願

そんなことといふやない、ならん處から日をまつた處、ぞんめいでくらしたら此上あろまいな、せけんを見くらべてみよ、どんなものあるやらうな、何もくやしむことはない、一寸といふたら此くらゐのたいそうになりてある、そこへ〳〵といへばどのやうなるともしれん、このたいもう事情、やう〳〵かたづき、一日二日三日、ぞんめいでゐるのに、何もくやむ事いらん十分やがな。

△明治二十六年三月十八日午後一時御咄（おさと様死去の節）

何もどうもかうも思ふことといらん、あと〳〵なんでもかでもつゞかさにやならん、これまでは十分〳〵につれて通りある、昨年〳〵事情、なんどの刻限でせきたる事情、これもようきいてくれにやならん、どういふ事刻限にてしらしたる事、のばす事できん、刻限といふはみなおもはくからでるのが刻限やで、これをよう聞き分けにやならん、これからはいそげはいそぐ、じつとせいといへばじつとする、なんでもかでも、これからは席をいさましてくれにやならんで、いさまさにやならんで、これをばあつちこつちなつたら、ともしびの消えたのも同じ事、みなそらを見るのも同じ事、是からは刻限の事情はずさぬやう、席はまだ〳〵つれて通らにやならん、席はまだ〳〵なかばであるで、一時の事情、くやむ事ない、あと〳〵の事情、世界の事

情みてたんのふせにやならん、あすにかへるすぐにかへる、くやむことない、いさまにやならんで、席がいさめばせかいもいさむ、これからは席はどこへつれてでるやらわからんで、あそびに行きたいといへば、相當のものをつけてでてくれにやならんで、これだけたのみおく。

△明治二十六年三月十八日夜一時三十分刻限

さあ〳〵まだ〳〵一寸一時、まだどうであらうと思ふてゐる、さあ〳〵、十分いきのかよふたる間一つ、さあ〳〵今日までは日々たんのふしてくらした、なにもおもはくはない、いきのかよふたる間一つはなしおく、一のたのむといふ事たのむ、これからさき〳〵みなどんな事も、だんじあふてくれるやう、これから一寸むかふへどうしようかうしようういらん、いつ〳〵まで

たのまれた事、十分たんのふ〳〵、一時の處かたるかたられんからつれてでる、二人兄弟かたづけてない、どんな事もさしづをもらうてくれ、又一つ御席さん〳〵四五年の間、まことにゆるりとさしてもろた、御席さんが今日の日であつたら、しんくつくすも水の沫、それではどうもならん、御席さんに一寸いりかはつたやうなもの、御席さんの處きのどくたのみおく、何もむつかしい事いらん、うち〳〵の處兄弟の處、一軒の内をさめ、これから御席さんの處、きれいにして、しばらくの處たのみにでた、御席さんの處十分きれいにして、年のいた人にもりしてじつまでたのむ、一寸わからんであらうと思ふ、二度三度助けてもらうた、十分まんぞく十分たのみおく、御席さんの處これだけたのむ、わしはなんどきどこへかへるかもしれん、北